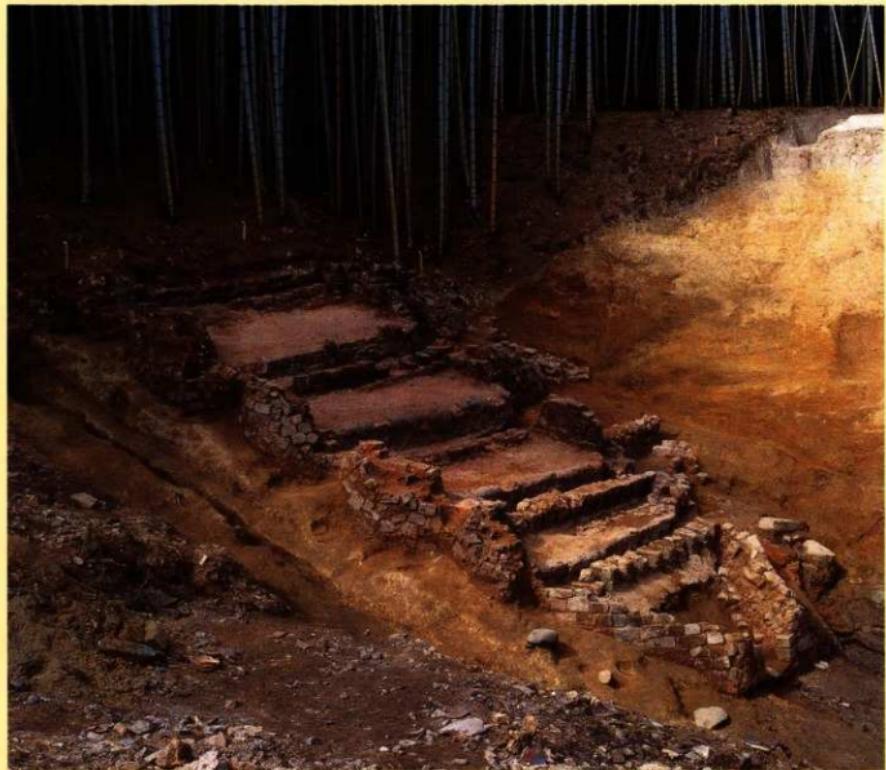


おお た や かま あと
大 田 屋 窯 跡

—一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VII—
石見焼関連遺跡調査報告3



2002年10月

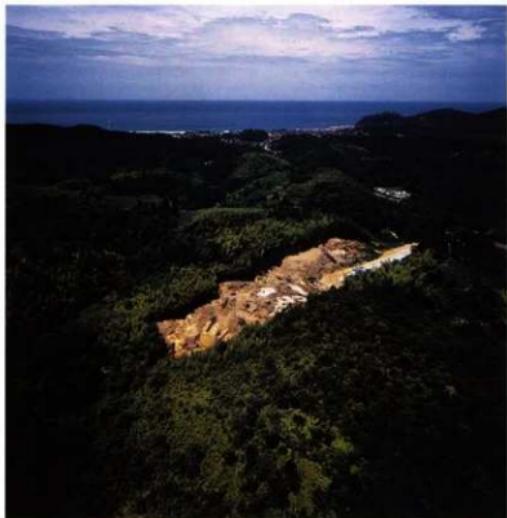
国 土 交 通 省 浜 田 工 事 事 務 所
島 根 県 教 育 委 員 会

おお た や かま あと
大田屋窯跡

——一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ——
石見焼関連遺跡調査報告3

2002年10月

国土交通省浜田工事事務所
島根県教育委員会



大田屋窯跡調査区遠景
(航空写真)



大田屋窯跡 1号窯完掘

巻頭カラー 2



大田屋窯跡 1号窯焼成
室断ち割り状況①



大田屋窯跡 1号窯焼成
室断ち割り状況②



大田屋窯跡物原 5 断面

序

国土交通省浜田工事事務所においては、活力に満ちた石見地方を目指して、暮らしの利便性、安全性、快適性の向上を図り、人や自然にやさしい環境形状にも配慮しつつ、道路整備を進めているところあります。

一般国道9号は、山陰地方の諸都市を東西に結ぶ唯一の主要幹線道路ですが、近年の交通量増加や都市部の市街化に伴い、都市間の円滑な連携や生活環境の確保が困難となってきたため、交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し、地域社会の発展に資する事を目的に、江津市嘉久志町～浜田市高佐町において、江津道路の事業を進めています。

この道路事業は、一般国道9号のバイパスを当面、山陰自動車道の機能を併せ持つ道路として活用を図ることとしており、国土の骨格を担う重要な道路でもあります。

更に、過疎化が進み、若者の流出に悩むこの地域に活力を吹き込む道路でもあります。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも充分配慮しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない文化財については、道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

江津道路の事業においても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同教育委員会や市教育委員会のご協力のもと、江津道路は平成3年度から発掘調査を実施しております。

本報告書は平成8年度に実施した「大田屋窯跡」の調査結果をまとめたものであります。

本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術および教育のために広く利用されると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも充分留意しつつ進められることへのご理解をいただくことを期待するものであります。

最後に、今回の発掘調査および本書の編集にあたり、御指導御協力いただいた島根県教育委員会ならびに関係各位に対し心より謝意を表すものであります。

平成14年10月

国土交通省中国地方整備局浜田工事事務所

所長 吉村伸幸

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）の委託を受けて、平成4年度から一般国道9号江津道路建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりましたが、このたび7冊目となる報告書を刊行する運びとなりました。

本書は、平成8年度に調査を行った石見焼生産遺跡である大田屋窯跡の調査成果をまとめたものです。「石見焼」は、石見地方を中心に江戸時代の終わり頃から昭和30年代にかけて盛んに生産され、販路を広げ、全国的に消費されるにまで発展した焼き物です。特に独特の色あいをもつ赤瓦と「ハンド」と呼ばれる大甕は広く好まれています。このうち赤瓦は、現在でも石見地方の景観を形成する要素の一つとして石見の風土にとけ込んでいます。

今回の調査では、幕末から昭和にかけて使用された連房式登り窯跡と製作関連遺構が発見され、当時の石見焼の隆盛を垣間見ることができました。

本書が、現在も地域の重要な地場産業である石見焼の歴史や、埋蔵文化財に対する理解と関心を高める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の刊行にあたり地元の方々をはじめ国土交通省浜田工事事務所ならびに浜田市・江津市教育委員会に御支援・御協力をいただきましたことを厚くお礼申し上げます。

平成14年10月

島根県教育委員会

教育長 広沢卓嗣

例 言

- 1 本書は、建設省中国地方建設局（当時）の委託を受けて島根県教育委員会が平成8年度に実施した一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の記録である。
- 2 本書で扱う遺跡は、島根県江津市波子町口118—1外 所在 大田屋窑跡 である。
- 3 調査組織は下記のとおりである。

調査主体 島根県教育委員会
平成8年度 現地調査
事務局 勝部 昭（島根県教育庁文化財課課長）、宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）
調査員 大庭俊次（埋蔵文化財調査センター文化財保護主事）、守岡利栄（同主事）、石合敬子（同教諭（兼）文化財保護主事）、伊藤善太郎（同講師（兼）主事）、梅木茂雄（同臨時職員）、野津旭（同臨時職員）、白澤俊也（三隅町教委より研修）
平成14年度 報告書作成
事務局 宍道正年（教育庁埋蔵文化財調査センター所長）
調査員 守岡利栄（同文化財保護主事）、浅野哲（同教諭（兼）文化財保護主事）
- 4 現地調査にあたっては下記の方々から指導を受けた（五十音順、敬称略、役職名は当時）

大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長）
関口廣次（青山学院大学文学部講師）
- 5 発掘作業業務（発掘作業員雇用等）は、建設省中国地方建設局、島根県教育委員会、（社）中国建設弘済会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託した。
- 6 現地調査及び資料整理に際しては、調査指導者の他以下の方々から有益な御指導・御助言・御協力をいただいた。（五十音順、敬称略、役職は当時）

青木修（財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター）、鷲山春男（鷲田窯業所）、服部郁（瀬戸市教育委員会文化財課）、藤澤良祐（財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター）
- 7 掘削で使用した方位は、測量法による第Ⅲ座標系のX軸方位を示し、レベル高は海拔高を示す。
- 8 本書で使用した図の内、第1図・第2図は国土地理院発行のものを、第3図は建設省浜田工事事務所作成のものを、第8図は（株）アジア航測が作成したものを一部改編して使用している。
- 9 本書に掲載した遺物の実測は調査員の他、下記の者が行った。

持田和男（教育庁埋蔵文化財調査センター教諭（兼）文化財保護主事）、阿部智子（同臨時職員）
- 10 本書に掲載した遺物の写真撮影は守岡と浅野が行った。
- 11 本書の執筆は第2章を浅野が、その他の執筆及び編集を守岡が行った。
- 12 本書掲載の遺物、実測図、写真等の資料は、島根県松江市打出町33 島根県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。

本文目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 位置と歴史的環境	2
第3章 調査の結果	7
1節 発掘調査の経過と概要	7
2節 東側斜面調査区	10
(1) 調査前の状況と概要	10
(2) 1号窯	10
(3) 物原について	18
(4) 平坦面について	21
3節 尾根上調査区	40
(1) 道状遺構について	40
(2) 池状遺構について	40
(3) 段状遺構について	40
第4章 まとめ	43

表目次

第1表 江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘遺跡一覧	1
第2表 大田屋窯跡周辺の窯業関連遺跡	6
第3表 大田屋窯跡計測値	15
第4表 大山屋窯跡出土遺物観察表 (1)	45
第5表 大田屋窯跡出土遺物観察表 (2)	46
第6表 大田屋窯跡出土遺物観察表 (3)	47
第7表 大田屋窯跡出土遺物観察表<写真のみ掲載> (4)	47

挿図目次

第1図 大田屋窯跡の位置と周辺の遺跡 S = 1 / 80000	3
第2図 大山屋窯跡周辺の窯業関連遺跡 S = 1 / 40000	5
第3図 大田屋窯跡周辺の地形 S = 1 / 2000	7
第4図 大田屋窯跡トレンチ調査と調査区の配置 S = 1 / 2000	9
第5図 大田屋窯跡物原の範囲と堆積状況確認の土層ライン設定 S = 1 / 300	11
第6図 調査前 1号窯・2号窯地形測量図 S = 1 / 400	12
第7図 大田屋窯跡東側調査区遺構配置図 S = 1 / 300	13
第8図 大田屋窯跡 1号窯平面図・立面図・横断面土壙図 S = 1 / 120	14

第9図	大田屋窯跡1号窯縦断面上層図 S = 1 / 120	15
第10図	大田屋窯跡1号窯出土遺物① S = 1 / 3	16
第11図	大田屋窯跡1号窯出土遺物② S = 1 / 3	17
第12図	大田屋窯跡物原A-A' ライン土層断面図 S = 1 / 80	19
第13図	大田屋窯跡物原A-A' ライン土層断面拡大図 S = 1 / 50	20
第14図	大田屋窯跡物原5出土遺物実測図① S = 1 / 5	21
第15図	大田屋窯跡物原5出土遺物実測図② S = 1 / 5	22
第16図	大田屋窯跡物原5出土遺物実測図③ S = 1 / 5	23
第17図	大田屋窯跡物原6 D-D' ライン土層断面図 S = 1 / 80	24
第18図	大田屋窯跡物原2~3 C-C' ライン土層断面図 S = 1 / 50	25
第19図	大田屋窯跡物原採集遺物実測図① S = 1 / 3	26
第20図	大田屋窯跡物原採集遺物実測図② S = 1 / 3	27
第21図	大田屋窯跡物原採集遺物実測図③ S = 1 / 3	28
第22図	大田屋窯跡物原採集遺物実測図④ S = 1 / 3	29
第23図	大田屋窯跡物原採集遺物実測図⑤ S = 1 / 3	30
第24図	大田屋窯跡物原採集遺物実測図⑥ S = 1 / 3	31
第25図	大田屋窯跡物原採集遺物実測図⑦ S = 1 / 3	32
第26図	大田屋窯跡物原採集遺物実測図⑧ S = 1 / 5	33
第27図	大田屋窯跡物原採集遺物実測図⑨ S = 1 / 3	34
第28図	大田屋窯跡物原採集遺物実測図⑩ S = 1 / 3	35
第29図	大田屋窯跡物原採集遺物実測図⑪ S = 1 / 3	36
第30図	大田屋窯跡物原採集遺物実測図⑫ S = 1 / 3	37
第31図	大田屋窯跡平坦面第1造構面造構配図 S = 1 / 150	38
第32図	大田屋窯跡平坦面第2造構面造構配置図 S = 1 / 150	39
第33図	大田屋窯跡建物跡出土遺物実測図 S = 1 / 3	40
第34図	大田屋窯跡尾根上調査区造構配置図 S = 1 / 200	41
第35図	大田屋窯跡池状造構実測図 S = 1 / 80	42
第36図	大田屋窯跡池状造構出土遺物実測図 S = 1 / 3	42

写真図版目次

- 卷頭カラー1 大田屋窯跡調査区遠景（航空写真）
 大田屋窯跡1号窯完掘
- 卷頭カラー2 大田屋窯跡1号窯焼成室断ち割り状況①
 大田屋窯跡1号窯焼成室断ち割り状況②
 大田屋窯跡物原5断面
 大田屋窯跡東側斜面調査区調査前近景（南から）
 大田屋窯跡物原2~4調査前近景（東から）

	大山屋窯跡 1 号窯調査前近景	(東から)
P L 2	大山屋窯跡 1 号窯完掘	(東から)
	大田屋窯跡 1 号窯完掘	(北から)
	大田屋窯跡 1 号窯完掘	(南から)
P L 3	大田屋窯跡 1 号窯溝状造構断面	(東から)
	大田屋窯跡 1 号窯大口焚き口部分	(東から)
	大山屋窯跡 1 号窯大口排水施設	(上から)
P L 4	大田屋窯跡平坦面完掘	(南東から)
	大田屋窯跡物原 2 堆積状況	
	大田屋窯跡物原 2 堆積状況	
P L 5	大山屋窯跡平坦面 1 面完掘状況	(北から)
	大田屋窯跡 A - A' ライン土層堆積状況①	
	大田屋窯跡 C - C' ライン上層堆積状況②	
P L 6	大山屋窯跡平坦面窯道具集積土坑	
	大田屋窯跡平坦面 1 陶器集積状況	
	大田屋窯跡平坦面 2 面建物跡検出状況	
P L 7	大田屋窯跡物原 6 堆積状況	
	大田屋窯跡尾根上調査区遺構検出状況	
	大田屋窯跡尾根上調査区加工段状遺構 (西から)	
P L 8	大田屋窯跡尾根上調査区池状遺構完掘	
	大田屋窯跡 2 号窯	
	大田屋窯跡 2 号窯	
P L 9	大田屋窯跡出土遺物	
P L 10	大田屋窯跡出土遺物	
P L 11	大田屋窯跡出土遺物	
P L 12	大山屋窯跡出土遺物	
P L 13	大田屋窯跡出土遺物	
P L 14	大田屋窯跡出土遺物	
P L 15	大田屋窯跡出土遺物	
P L 16	大田屋窯跡出土遺物	
P L 17	大田屋窯跡出土遺物	
P L 18	大田屋窯跡出土遺物	
P L 19	大田屋窯跡出土遺物	
P L 20	大山屋窯跡出土遺物 (写真のみ掲載)	
P L 21	大田屋窯跡出土遺物 (写真のみ掲載)	
P L 22	大田屋窯跡出土遺物 (写真のみ掲載)	
P L 23	大田屋窯跡出土遺物	

第1章 調査に至る経緯

一般国道9号江津道路は、国道9号線の交通渋滞緩和と石見地域の高速交通網の整備を目的として建設省（現国土交通省）により、4車線の自動車専用道路として建設が計画された。起点は江津市渡津町、終点は浜田市浜田自動車道浜山インターチェンジである。

江津道路建設の計画を受け、島根県教育委員会文化課（以下文化課）は、平成元年に江津市嘉久志町から敬川町までの分布調査を実施し、13か所の遺跡の存在を確認している。平成3年1月には、建設省浜田工事事務所・県土木部・文化課・江津市教育委員会の4者が協議を行い、発掘調査について具体的な検討がなされた。その結果、平成3年度には建設省の委託を受けた江津市教育委員会が発掘調査を行うこととなり、同7月に江津市二宮町半田浜西遺跡、翌平成4年1月に同都野津町のカワラケ免遺跡、鹿伏山遺跡のトレンチ調査が行われた。これらの遺跡の調査後、建設省浜田工事事務所・江津市教育委員会・文化課で再度協議を行い、平成4年度から文化課（後に文化財課に改編改称）が本格的に発掘調査に入ることとなった。

平成4年度には鹿伏山遺跡、半田浜西遺跡、平成5年度には江津市嘉久志町の久本奥窓跡、同二宮町の二宮C遺跡、同敬川町の古八幡付近遺跡、カワラケ免遺跡、平成6年には江津市嘉久志町の嘉久志遺跡、同二宮町の飯田C遺跡、古八幡遺跡の発掘調査を行った。一年おいて平成8年度には江津市二宮町の恵良遺跡、同波了町の大田屋窯跡（本書報告）、平成9年度江津市二宮町の神主城跡、飯田A遺跡、古八幡付近遺跡、敬川町の横路古墓、平成10年度は江津市敬川町室崎商店裏遺跡、古八幡遺跡、浜田市上府町の長東坊師窯跡、平成11年度は江津市波子町の堂々炭窯跡、浜田市上府町の上条遺跡、水戸（三戸）神社跡、上府八反原窯跡、平成12年度は立女遺跡の発掘調査を行った。

なお、平成9年9月に予定ルートの変更に伴う遺跡の分布調査の依頼を受け、12月から3月にかけて再度の分布調査を実施し、新たに8か所で遺跡の存在を確認した。このうち2か所については平成10年度に再度検討した結果、本発掘調査を行う遺跡から除外している。

第1表 江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘遺跡一覧（2002.10現在）

遺跡名	遺跡の内容	報告書等
半田浜西遺跡	先史～中世の集落跡	一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
鹿伏山遺跡	縄文土器片など出土	一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
二宮C遺跡	弥生時代後期、古墳時代中期、中世の集落跡	一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
久本奥窓跡	7世紀後半から8世紀後半須恵器窓跡等	一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
古八幡付近遺跡	古墳時代後期、古墳時代後期須恵器式灰陶器窓跡等	一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
嘉久志遺跡	洋服はか	一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
飯田C遺跡	敷石地	一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
志賀遺跡	古代末～中世の集落跡	一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
大洲屋窯跡	石見燒生石灰窯跡	本文書
神王城跡	中世山城	一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
飯山A遺跡	石臼焼生石灰窯跡	一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
横路古墳	古墳時代後期集落跡、近世集落跡・十坑墓	一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
宿泊酒店裏遺跡	古墳時代後期横穴式石室	一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
長東坊師窯跡	石見燒生石灰窯跡	一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
草々炭窯跡	近世後半、木炭窯跡	一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
上作遺跡	柱穴跡、白堀	一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
水戸（三戸）神社跡	古墳、時期不明の段状構造	一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
上府八反原窯跡	石見燒生石灰窯跡	一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
立女遺跡	土坑、ゴットなど	一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
先行井畠道路1km		未調査
先行井畠道路500m		未調査
先行井畠道路300m		未調査
大尾谷道路		未調査

第2章 位置と歴史的環境

島根県中央部に位置する江津市は、市域のほぼ中央を、中国山地に源を発する“中国太郎”的呼び名で有名な江の川が流れ、北の日本海へ注いでいる。

大田屋窯跡（第1図中のA、及び第2図中のA）は、江津市中心部から約8キロ西にある波子町の大平山丘陵地の後背に位置し、島根県西部の中心地であり、かつての石見国府が置かれていたと考えられている^{※1}浜田市と隣接している。

以下、大田屋窯跡周辺で確認された主要な遺跡と石見焼についても紹介する。

縄文時代の遺跡では、縄文時代中期の地域的な土器形式として「波子式」が設定された県下でも有名な大平山遺跡群（第1図の遺跡番号の1、以下同じ）や鹿伏山遺跡（2）、古八幡付近遺跡（3）など数か所が知られている。

弥生時代の遺跡は縄文時代に比べると数が増加し、代表的な集落遺跡としては、古八幡付近遺跡、伊賀神社脇遺跡（4）が挙げられる。これらの遺跡では弥生時代全般の遺物が出土しており、古八幡付近遺跡では中期の居住域や環壕等が検出された。都治町の高津遺跡では弥生時代後期から古墳時代中期の集落遺跡が確認され^{※2}、江の川東岸の砂丘地には後期の列石墓として知られる波来浜遺跡がある。また、下府川上流の谷間に位置する上条遺跡では扁平紐式銅鐸が2個出土したと伝えられており、これは日本における銅鐸分布の最西端の例である。

古墳時代の集落は、二宮C遺跡（5）、横路古墓（6）などが江津市内でわずかに知られる程度である。古墳に関しては、確実に前・中期と思われる古墳は確認されておらず、江津市の高野山古墳群（7）、古八幡付近古墳群、浜田市の片山古墳（8）など横穴式石室をもつ後期古墳がほとんどである。

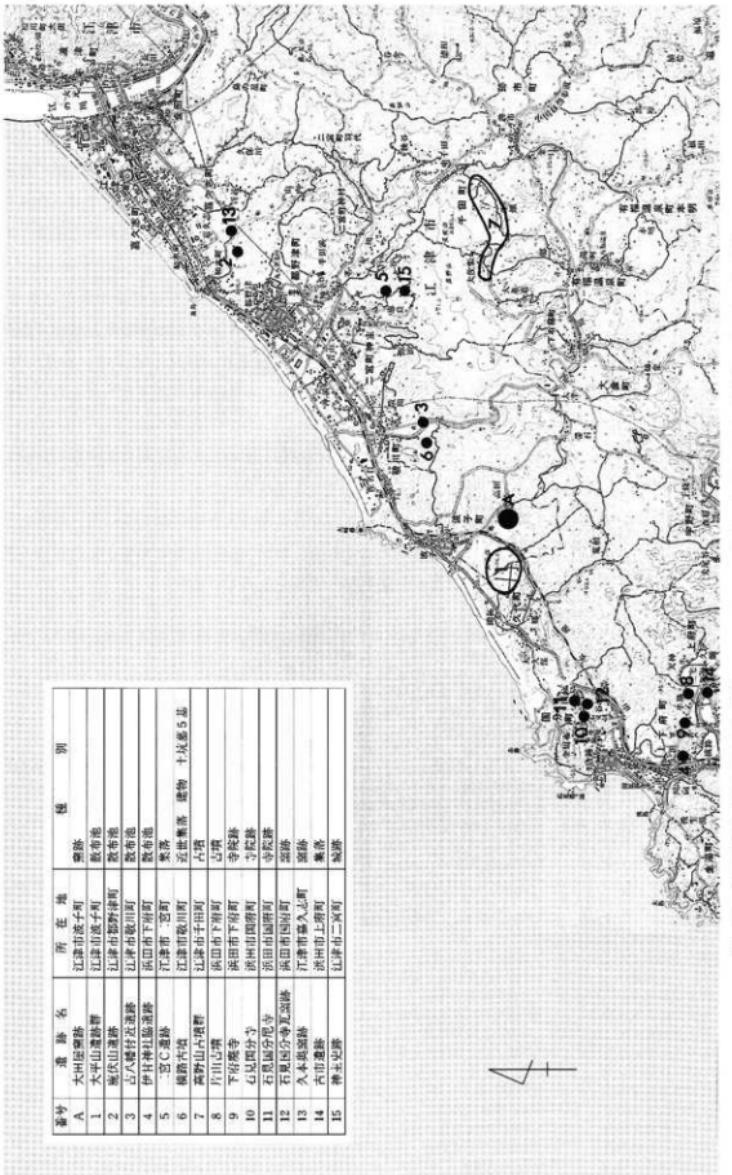
古代になると波子に隣接する下府川下流域には石見国府が置かれたと考えられている。石見国府の所在はまだ確定されていないが、下府廃寺（9）や石見国分寺（10）・同國分尼寺（11）が所在するなど地域の中心として栄えた様子がうかがえる。また、石見国分寺瓦窯跡（12）では瓦が、江津市薦久志町にある久本奥窯跡（13）では瓦や須恵器が生産されていた。

中世になると、浜田市下府川流域では、古代の国府は新たに「府中」として発展し、南北朝時代まで栄えたと考えられている^{※3}。代表的な遺跡として古市遺跡（14）や横路遺跡が知られる。城跡では笠山城跡、八反原城跡が挙げられる。またこの地域には、伊豆山安国寺、伝御神本（益田）氏三代の墓、白口大明神、上府八幡宮が所在し、地域の中心として栄えていた一端がうかがえる。

江津市西部は国人領主である都野氏が支配し、戦国末期に江の川西岸の郷田に移すまで、二宮町に拠点が置かれていたと思われる^{※4}。代表的な集落遺跡として二宮C遺跡が挙げられ、城跡としては都野氏の神主城跡（15）のほか、福屋氏の拠点である本明城跡がある。

近世になると、この地域は浜山藩領となる。浜山藩は中国地方の押さえとして幕府に重視され、交通の要地として栄えた。江戸時代に整備された西廻航路や北前船の航路沿いに位置する地の利もあり^{※5}、江戸時代の末期から明治・大正、昭和30年代頃にかけて多くの石見焼が生産され、日本各地に伝えられた。

石見焼窯跡は、これまでに江津市西部では田室窯跡、三浦窯跡、飯山A遺跡が、浜田市東部では



第1図 大田田震跡の位置と周辺の遺跡 S = 1 / 80000 (平成9年国土地理院発行の地図を一部改変)

長東坊師窯跡、上府八反原窯跡（調査時は佐々木窯跡）が発掘調査されている。

石見焼について

石見焼とは、近世以降石見地方で生産された粗陶器・瓦などを総称していう。石見地方では、都野津層^{**}といわれる良質の粘土が海岸線に沿って大量に分布している。この陶土層が、特に江津市では海岸から1キロと離れていない標高50メートルから70メートルの丘陵緩傾斜地に豊富に埋蔵されている。原料も製品もすべてが重量品となる窯業が発展するのに、この地は最適であったものと思われる。良質の粘土や港に近い交通の便利な傾斜地に連房式登り窯が数多く作られて操業していた。これらの窯跡の位置は、第2図に示してある。

江戸時代寛政期ごろから江津の波子村、嘉久志村、浜田外浦などに登り窯が築かれたとされる。石見焼の職人たちは、他地域の陶器と競合しないような大型の壺や壺などの容器や、擂鉢・捏鉢・片口などの炊事用の粗陶器製作の技術を磨き、石見焼の名は次第に全国に広まっていた。特に、水をためておく大型の壺は“はんど”とよばれ、石見の赤瓦、いわゆる“石州瓦”とともに石見焼を代表する物であった。

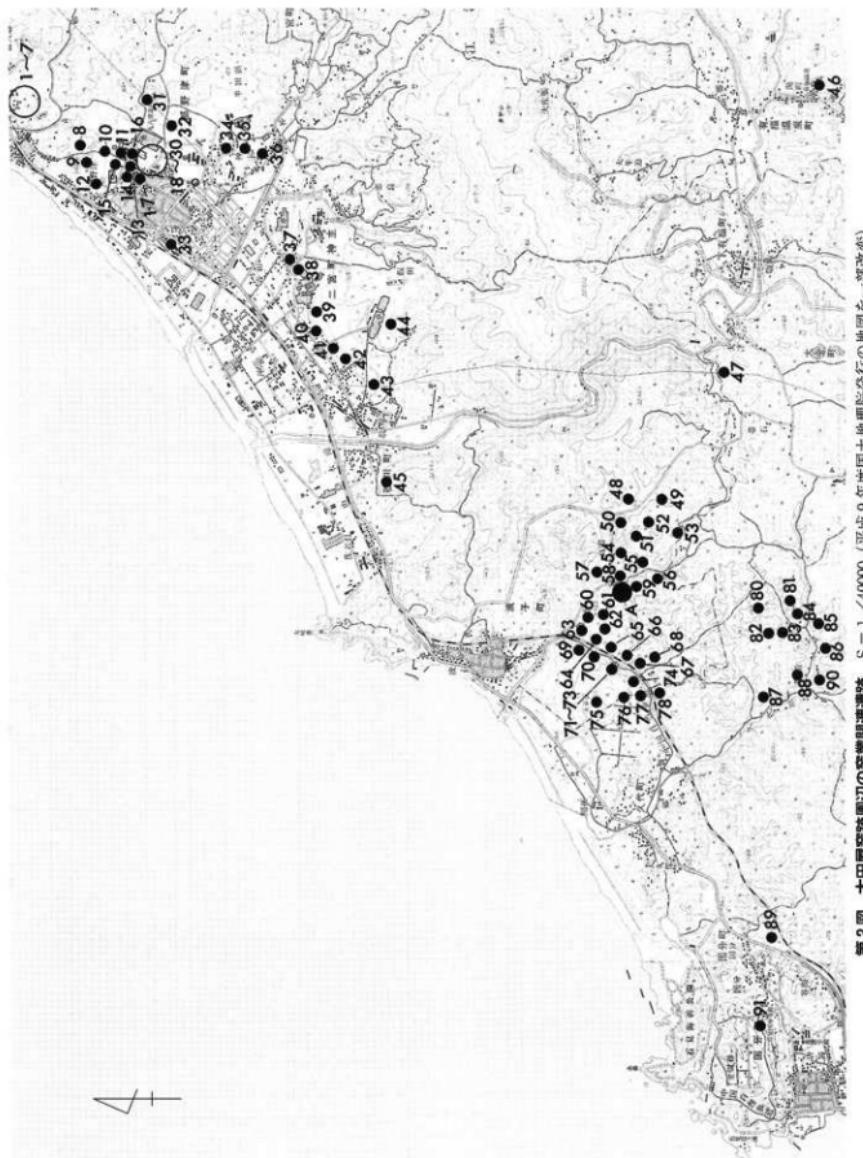
このような石見焼の隆盛には2つの段階があるといわれる。1つは江戸後期の北前船の就航であり、2つは明治中期から大正期の国道・鉄道の貫通による販路拡張であったといわれている。

戦後は化学製品による容器革命と上水道普及によって石見焼は大きな打撃を受けた。さらに、燃料革命によって岐路に立たされて独特の登り窯は姿を消したが、伝統的技術を生かした手作り民芸陶器と、オートメーション化した石州瓦の大量生産に活路を求めている[†]。

- 註 1 島根県教育委員会 「石見国府都定調査報告Ⅰ」1978 島根県教育委員会「石見国府推定調査報告Ⅱ」1979
島根県教育委員会 「石見国府都定調査報告Ⅲ」1980による。
註 2 江津市教育委員会 横木茂雄氏の佛教示による。
註 3 浜田市誌編纂委員会 「浜田市誌 上巻」第3章 中世の浜田」1973による。
島根県教育委員会 浜田市教育委員会 「山市遺跡発掘調査既報」1995による。
浜田市教育委員会 「横路遺跡」1997による。
註 4 江津市誌編纂委員会 「江津市誌 上巻」第1章 中世後期の石穴寺塔」1982による。
建設省浜田工事事務所・島根県教育委員会 「一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」1995による。建設省浜田工事事務所・鳥根県教育委員会、「神主城跡・京崎商店裏遺跡・古八幡付近遺跡・横路古墓 一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」2000による。
註 5 島根県教育委員会 「鳥根県歴史の道調査報告書第7集」1998年による。
註 6 山陰中央新報社 「島根県大百科事典 下巻」「都野津層」1982による。
註 7 山陰中央新報社 「鳥根県大百科事典 上巻」「石見焼」1982による。

参考文献

- ・建設省浜田工事事務所・島根県教育委員会 「嘉久志遺跡、飯田C遺跡、古八幡付近遺跡 一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」1997
- ・国土交通省浜田工事事務所・鳥根県教育委員会 「恵良遺跡、常々炭窯跡、上条遺跡、水戸（三戸）神社跡（上条古墳）・立女遺跡 一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」2001
- ・国土交通省浜田工事事務所・鳥根県教育委員会 「石見焼窯跡調査報告1（飯田A遺跡・長東坊師窯跡） 一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」2001
- ・国土交通省浜田工事事務所・鳥根県教育委員会 「石見焼窯跡調査報告2 上府八反原窯跡（佐々木窯跡） 一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅵ」2001
- ・鳥根県教育委員会 「鳥根県遺跡地図Ⅱ（鳥見編）」1992
- ・江津市教育委員会 浜田市教育委員会 「大平山遺跡群発掘調査外報」1988
- ・江津市教育委員会 「古八幡付近遺跡」1992
- ・江津市教育委員会 「波来浜遺跡発掘調査報告書」1973
- ・浜田市教育委員会 「浜田市遺跡詳細分布調査 国府地区Ⅰ」2002
- ・浜田市教育委員会 「下府廐守跡」1993
- ・浜田市教育委員会 「下府廐守跡発掘調査概報」1990
- ・浜田忠幸 「角の浦今昔 江津の歴史と文化」1997.4.23~9.3 山陰中央新報社



第2図 大田区馬場周辺の測量開墾跡 S = 1 / 40000 (平成9年度国土測量院発行の地図を一部改変)

図2表 大田屋窯跡周辺の窯業関連跡

第3章 調査の結果

第1節 発掘調査の経過と概要

大田屋窯跡は、江津市波子町の海岸部から南へ約1.5km入り込んだ標高約50mの丘陵地に所在する。現地は、江津・浜田両市にまたがる石見海浜公園から、有福温泉で知られる江津市有福町へと抜ける県道跡市波子停車場線からさらに丘陵地へと入り込んだ場所にある。谷を隔ててわずか200m北側にはJR山陰線が通じているものの、現地は深い竹藪、草木に覆われ、ここ数年はほとんど人の手が入っていないこともあり、かなり荒れた状態であった。



第3図 大田屋窯跡周辺の地形 S=1/2000 (スクリーントーン部は物原範囲)

大田屋窯跡は、地元ではその存在とおおよその位置は一部の研究者には知られていたようで、郷土研究誌の『石見誌』第十・第十一号には今回報告する2号窯らしき窯跡が「古沖屋窯」として紹介されるなどしていた。「大田屋窯跡」という名称は、平成3年に行われた分布調査後につけられた名称であり、どのようなきさつで「大田屋」という屋号を冠したかという資料が残っていないため詳細は不明であるが、関係者によると「一時大田屋」という仲貢業者が製品を販売したことがあったと聞き、その屋号を名称として採用したのではないか」ということであった。

現地には、道路予定地に約半分がかかる1号窯跡と、1号窯跡の東の用地外に2号窯跡と合計2基の石見焼登り窯跡が観察でき、その周囲には大量の陶器が投棄され散乱していた。また丘陵上や斜面には平坦面が観察でき、工房や窯に付属する関連施設が存在したことが想定できた。発掘調査に当たっては、遺跡の範囲が当初窯跡を中心にかなり広範囲にわたっていたため、まずトレンチを配し、遺構の有無の確認を行った(第4図)。この結果、1号窯跡の立地する斜面部分を「東側斜面調査区」、この西側にあたる丘陵尾根筋部分を「尾根上調査区」と呼び分け、二調査区で発掘調査を行うこととなった。

発掘調査の結果、東側斜面調査区で石見焼登り窯である1号窯跡と付属施設として製作工房の置かれていたであろう平坦面と建物跡1棟、土坑等を、また尾根上調査区では焼き物用の粘土を精製した池状遺構1と段状遺構1、道路状遺構1を検出した。また多量に陶器が投棄されていた物原出土遺物から、これらの窯跡で焼かれた製品の多くは陶器類であるが、初期には瓦の生産を行っていたことが明らかとなった。そして平坦面から出土した他地域産の磁器から、窯場としての成立が幕末～明治初期に遡り、明治・大正期に最盛期を迎え、昭和10年ごろまで生産を続けていたことが明らかとなった。

なお、発掘調査に合わせて関係者の方々に聞き取りの御協力を得た。これによると調査対象地外の2号窯については昭和10年代頃操業していたことをお教えいただいたが、1号窯については現地権者の方が所有した昭和20年代には既に荒廃しており「窯の存在自体も知らなかった」とのことである。詳細について調べることはできなかった。また切図から、字名に「土床」「酌池」「荒物床」など焼き物に関連性のある地名が多々見受けられたことからも周辺が石見焼の窯場であったことがうかがえた。

以下各調査区ごとに詳細を述べる。



第4図 大田屋窯跡トレンチ調査と調査区の配置 S = 1/2000

第2節 東側斜面調査区

(1) 調査前の状況と概要

1号窯は南北に延びる丘陵に挟まれた細い谷の突き当たり、丘陵斜面上に築かれている。調査前の観察では、窯の上部構造は既に壊れていて、その上にはさらに陶器が堆積していた。調査地外にある2号窯は焼成室の壁やアーチ状の天井部といった窯の上部構造が一部現存しており、この遺存状態の違いから、1号窯より2号窯の方が新しいことが想定された。1号窯跡周辺の丘陵斜面には、特に大量の陶器が投棄されており（物原1～6）、1号窯廃窯後も2号窯での操業時の不良製品廃棄がなされたものと思われた。

調査は、斜面の物原に土層観察用のアゼを残して堆積状況を確認しながら、純粹な陶器のみの堆積について一部重機を用いて除去することから開始し、その後1号窯の調査、作業場である平坦面の調査を行った。

この結果、連房式登り窯である1号窯、作業場である平坦面ではそこに建てられた建物跡1棟とピット群、瓦用の窯道具が集積された土坑1や大甕が埋め込まれた製作関連土坑2などを検出した。物原からは壺や壺といった陶器の他に瓦焼成時に使用する窯道具が出土したことからこの窯が陶器と瓦の両者を生産してことが明らかとなった。また「明治三十六年」銘のある陶板が出土したことからもおおよその操業時期が明らかとなった。

(2) 1号窯

(立地・基礎構造)

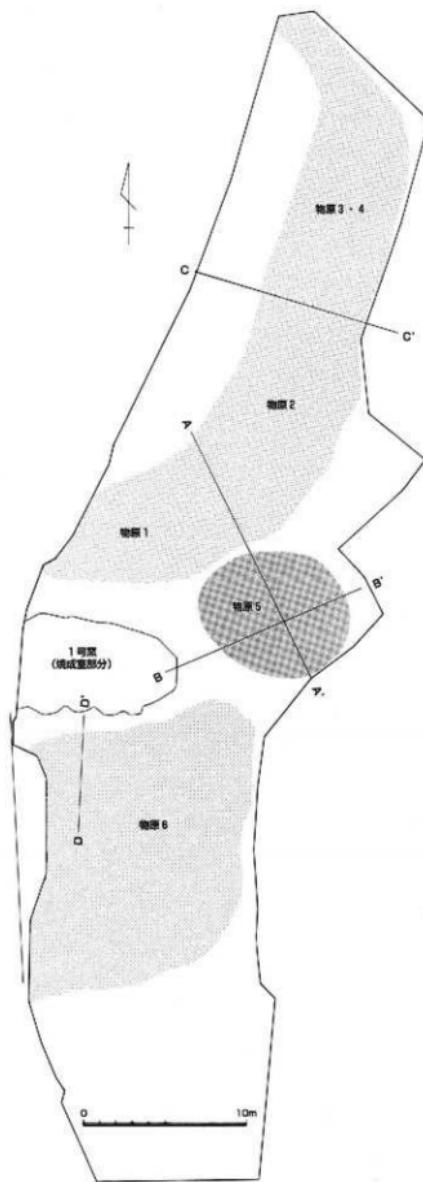
丘陵斜面の自然地形を利用した連房式登り窯である。最も低い位置にある薪の燃焼室である大口の焚き口部は標高36m、窯の後背部分である煙出し部は標高46mであり、自然の丘陵の傾斜を利用してセンターに直交する方向に築かれている。煙出部分は作業場が存在したと思われる広い平坦面と接している。なお、調査区外ではあるが、平坦面の中央には幅2mの道が貫き、これを通ると県道跡市波子停車場線に出ることもでき、製品の荷出しもこのルートで搬出されていたものと思われる。1号窯の北側は、作業スペースを確保するために斜面が削平されているが、同南側は、緩やかな傾斜の自然地形を大きく改変することなく窯が築かれている。窯の基礎構造は、斜面を20度の傾斜で削り出した整地面に盛り土を行い整えている。立地が谷水の集まる谷の最奥部ということもあり、薪の燃焼室である大口付近では雨が降ると雨水でぬかるみができるほどで、下部に厚く造成土が盛られ大口下部には暗渠状の排水施設を備えていた。

(規模)

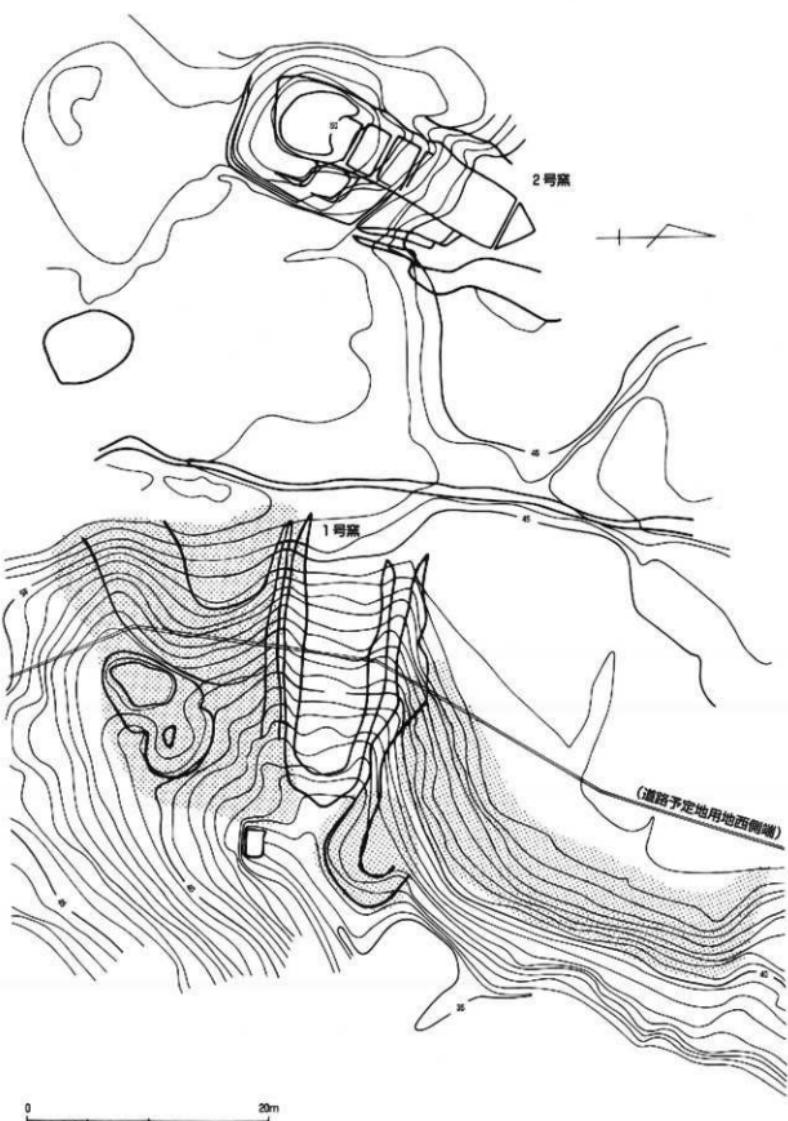
窯体の規模は、発掘調査部分以外を表面観察で補えば、全長約27m前後、最大幅約6.3m、10室前後の焼成室からなると想定される。規模の詳細は第3表の通りである。

(建築材)

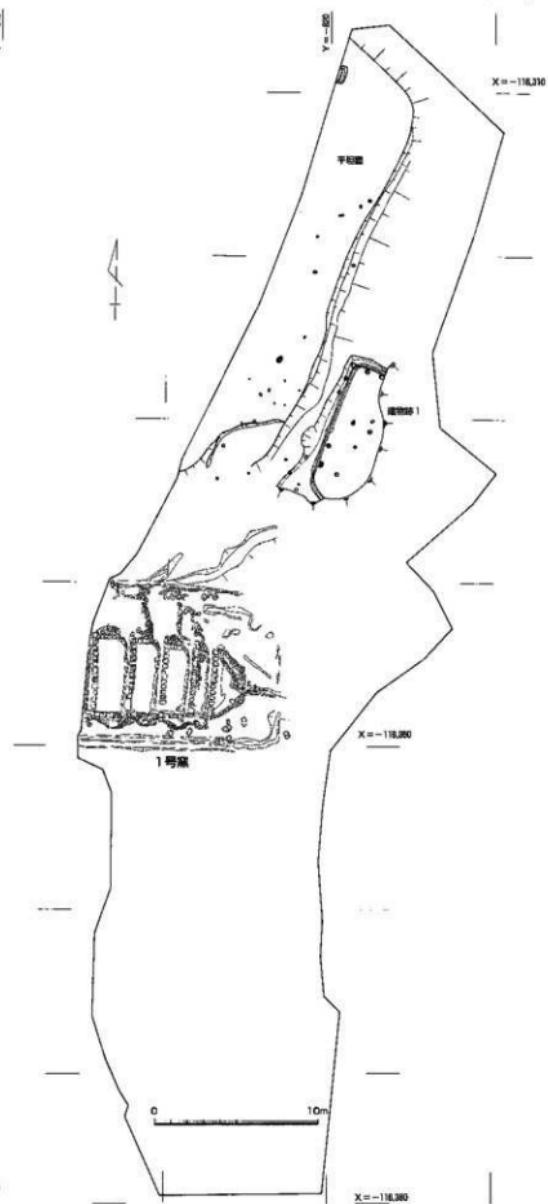
主な建築材は、アゼ・トンバリと呼ばれる耐火煉瓦が用いられている。使用場所によって大小2種のトンバリとより小型のアゼが使い分けられている。使用済みのトンバリ・アゼが窯本体からも周辺の物原からもほとんど出土しないことから廃窯後に持ち出されたのであろう。窯は大口から第1房（寄窯）、第2～4房までが調査区内で第5房以上が調査区外となっている。表面観察から見ると第8房までは確認でき、以上にふかせや煙出しといった施設が付属していたと見られる。煙出しの部分は基礎に高く盛り土を施すものではない。



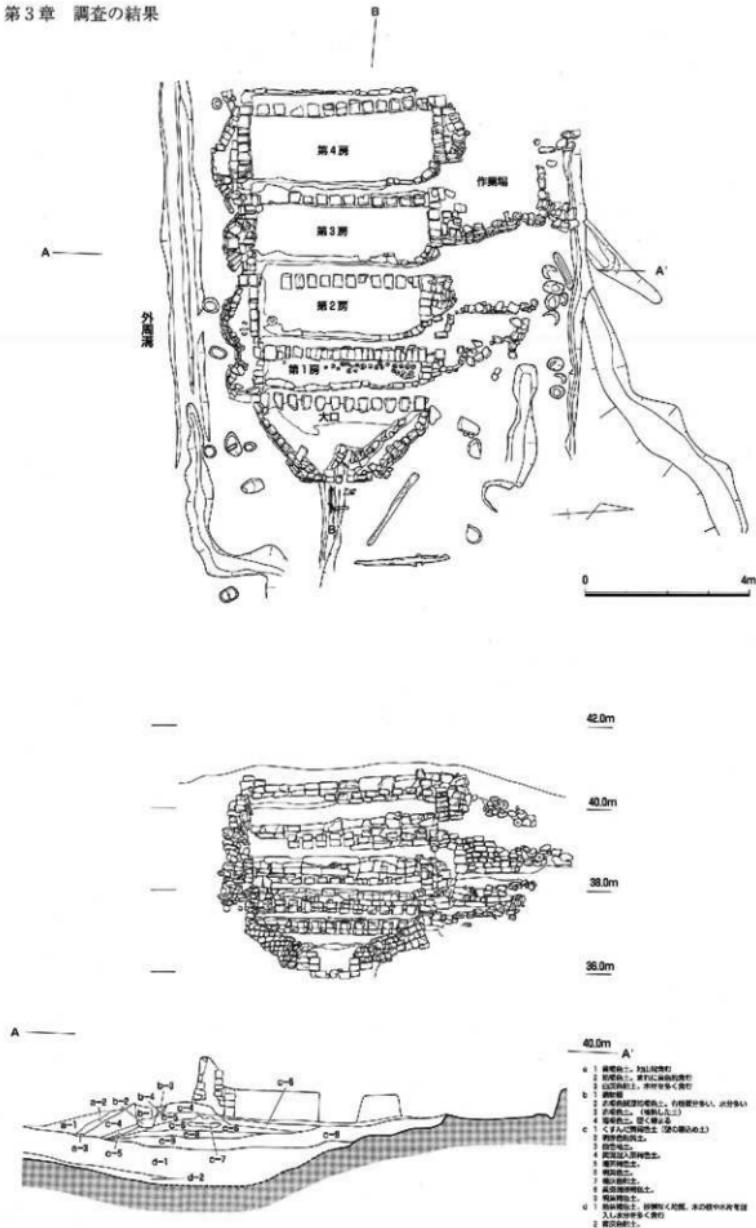
第5図 大田屋跡跡物原の範囲と堆積状況確認の土層ライン設定 S = 1/300



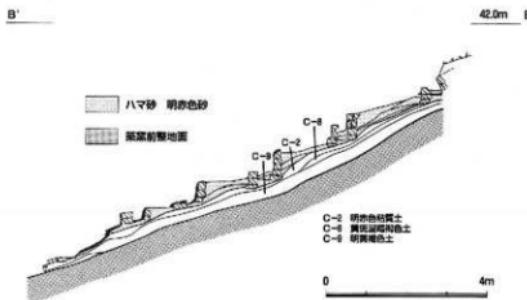
第6図 調査前1号窯・2号窯地形測量図 S = 1/400



第7図 大田屋跡東側調査区遺構配置図 S = 1 / 300



第8図 大田屋窯跡 1号窯平面図・立面図・横断面土層図 S = 1 / 120



第9図 大田屋窯跡1号窯縦断面土層図 S=1/120

第3表 大田屋窯跡計測値

1号窯

	焼成室内法			本体窯壁含む外法最大幅 (m)	
	最大幅 (m)	奥行き (m)	火格子层数	最大幅 (m)	奥行き (m)
大口部	3.88	1.76	11	4.28	2.08
第1房	3.80 (うちハマ部0.72)	0.92	12	5.40	1.16
第2房	3.96 (うちハマ部1.28)	1.48	12	5.80	1.80
第3房	4.32 (うちハマ部1.72)	1.40	13	5.88	1.96
第4房	4.52 (うちハマ部1.84)	2.00	13	6.24	2.36
全长 (推定)	本体窯壁含む外法 約 24m				
上屋覆鉢間	(幅・大口前庭は外周溝から想定、長さ後背は埋出まで) 長さ 27m、幅 約10.5m				

*1 「焼成室内法」の「火格子层数」は、各房と後ろ側の壁をつなぐ火格子の数(例えば、1房あれば、2房との間をつなぐ前の壁)を行なう。

*2 「本体窯壁含む外法最大幅 (m)」の「奥行き」は、各房と後ろ側の壁を区切る壁厚を含む。

2号窯

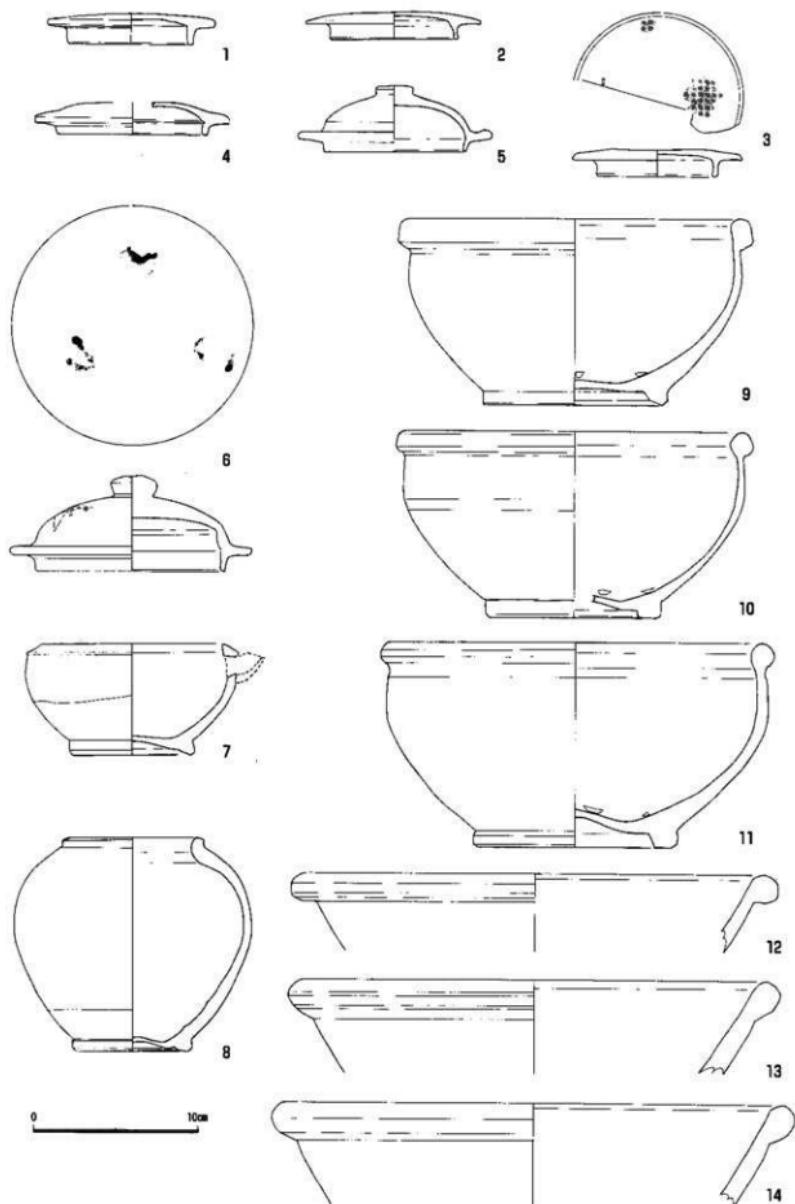
全長 (推定)	27m
最大窯体幅のみ (推定)	6 m

(大口)

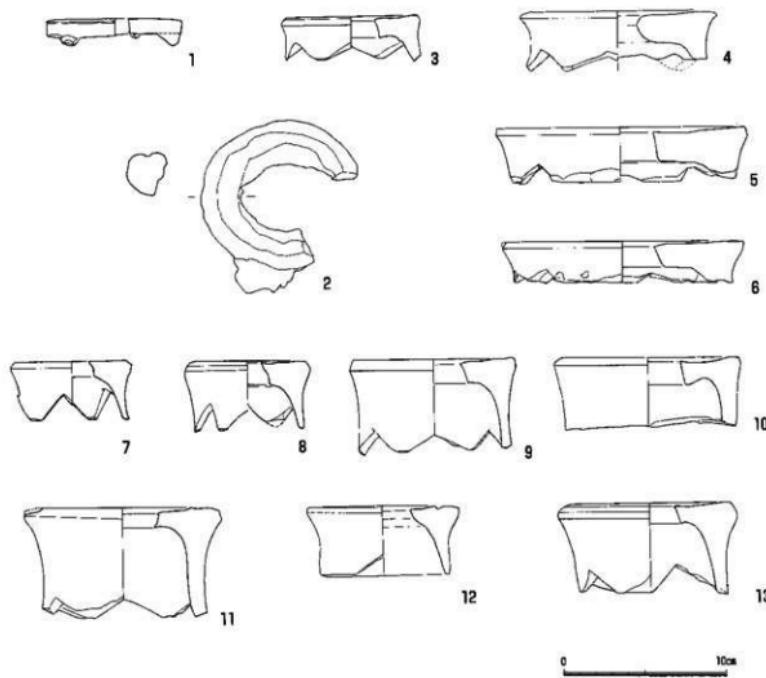
薪の燃焼室である。平面形は逆三角形で中央に1か所焚き口がついている。水分がたまりやすい立地を克服するために窯の床面の下層にヌケと呼ばれる上管状の焼成台をつなげて暗渠排水状の施設を設けている。このような施設は開窯当時の経営者や蒸窯師らを考える上で示唆的であろう。

(焼成室)

調査区範囲であった第1房から第4房を確認した。床面にはハマと呼ばれる耐火砂が敷かれ、ハ



第10図 大田屋窯跡 1号窯出土遺物① S=1/3



第11図 大田屋窯跡1号窯出土遺物② S=1/3

マは被熱し赤く変色していた。第1房にはハリが原位置に残されていた。

各焼成室の内部は、窯詰め作業時の通路の役割も果たす作業場と同一のレベルの下段部分と、より50cm程高く築かれた製品を並べる「ハマ」と呼ばれる上段部分とに分けられる。各焼成室をつなぐ「火立て」あるいは「火格子」と呼ばれる部分は大・小トンバリが用いられ、各室の熱量が次の室へと伝わる仕組みとなっている。

(煙出部)

調査範囲外であるため詳細は不明であるが、隣接する2号窯が土やスケなどの窯道具を多用して基礎に現地表面から2m以上も盛土した上に築かれているのに対し、地上部の盛土造成は1mに満たないほどである。

(作業場)

焼成室の北側には作業場としてのテラス面が造成されている。各焼成室の作業場は北側にのみあり、南側には造られていない。南側は焼成室の保温効果と窯構造を支えるために窯壁が耐火煉瓦と地山粘土で厚く築かれている。

(上 屋)

窯本体を覆う建物の痕跡として作業場と大口の全面に礎石と柱穴が検出された。

(1号窯出土遺物について) (第10図、写真図版PL 9, PL 10)

大口付近の炭層から出土したものと、1号窯焼成室にこされていたハリである。陶器類・ハリとも物原から出土した他の陶器と大差ないものである。

(3) 物原について

第5～6図に示したとおり、1号窯の周囲の斜面には大量の陶器が廃棄されていた。これを「物原」と呼び、各地点を1～6と呼び分けた。物原へは、平坦面での作業後、不要と見なされた陶器が廃棄され、上層は厚さ1m以上の純粹に陶器のみの層が認められた。この陶器層は、物原6が最も厚く、厚いところでは陶器層の厚さが3mに及ぶところもあった。物原1・2・3・4・5では、物原1～2と5が陶器層の堆積が厚く、窯本体から離れる物原3・4では陶器層が薄くなっていた。

上層の陶器層から採集できた遺物は、大半が陶器類で、壺・擂鉢・蓋壺・片口鉢・捏鉢・徳利・瓶等といった石見焼に一般的な陶器類の他に飯茶碗や汁碗、皿といった小型品も多数出土している。この陶器は、1号窯と2号窯の製作不良品の両者が含まれると思われ、これらで焼かれた製品の傾向をうかがうことができよう。

物原1・2・3・4では、上層の純粹な陶器層を除去すると平坦面の造成面や建物跡が検出された。

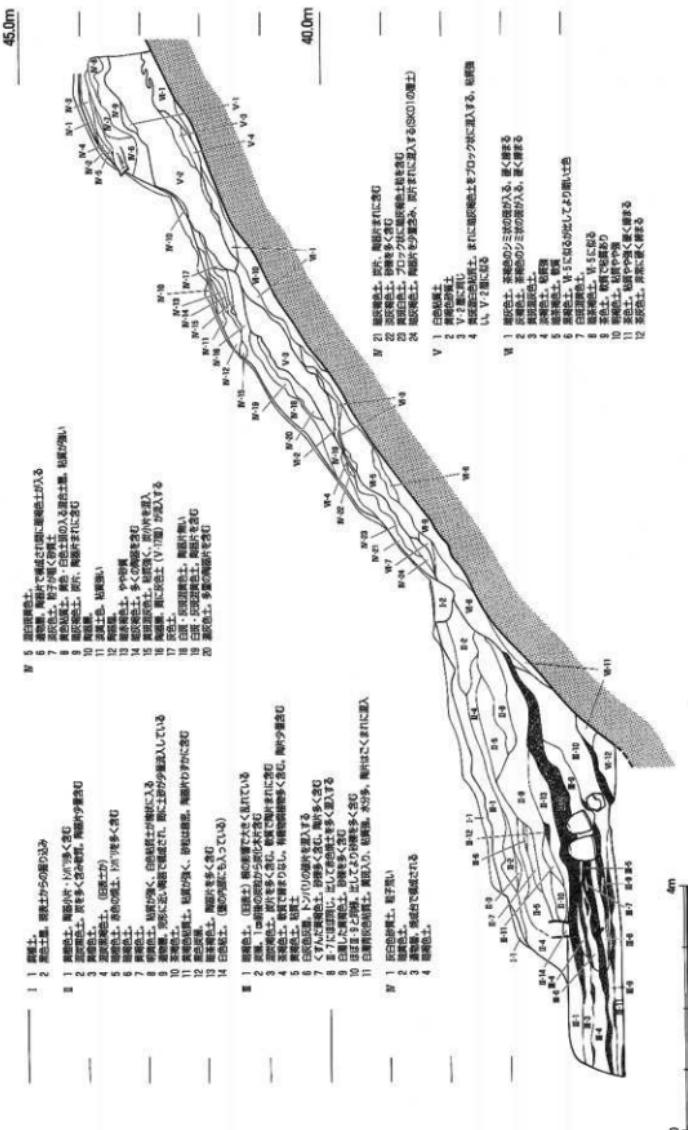
物原5は、当初物原1～2の一部と認識して上層の陶器層を除去していたが、陶器層の下層から炭を多量に含み1号窯大口前面から水平に堆積する層(第12図中Ⅲ層)が認められ、下層が分布する範囲を物原5と呼び分けた。物原5では完形の大甕(第14～16図)の口縁部を下に伏せたものが8個体集積してある以外は陶器は破片であることが多く、この点で上層の陶器層と異なる。また、赤く被熱したハマ砂やトンバリ、棧瓦を多く含む点でも趣を異にしている。物原5は1号窯大口と連続する層に堆積していることもあり、物原5は1号窯の操業時の灰原と考えられる。なお、物原5からは「明治三十二年」銘のある陶板(第27図4)が出土しており、1号窯の操業年代を知る資料である。

物原6は、1号窯の南にある。物原の中では最も陶器層が厚く堆積していたところである。上層の厚い陶器層を除去すると、1号窯外周溝と連続するレベル以下で堆積状況が大きく異なっており、炭やハマ砂、窯道具を含む堆積が認められた。これも物原5と同様に1号窯の操業時の堆積と考えられる。ここからは、陶器小片に混じって瓦類や瓦窯詰め用の道具(ハセ)が多数出土しており、物原5からも瓦が出土することも合わせると、1号窯では瓦の焼成も行われたものと思われる。

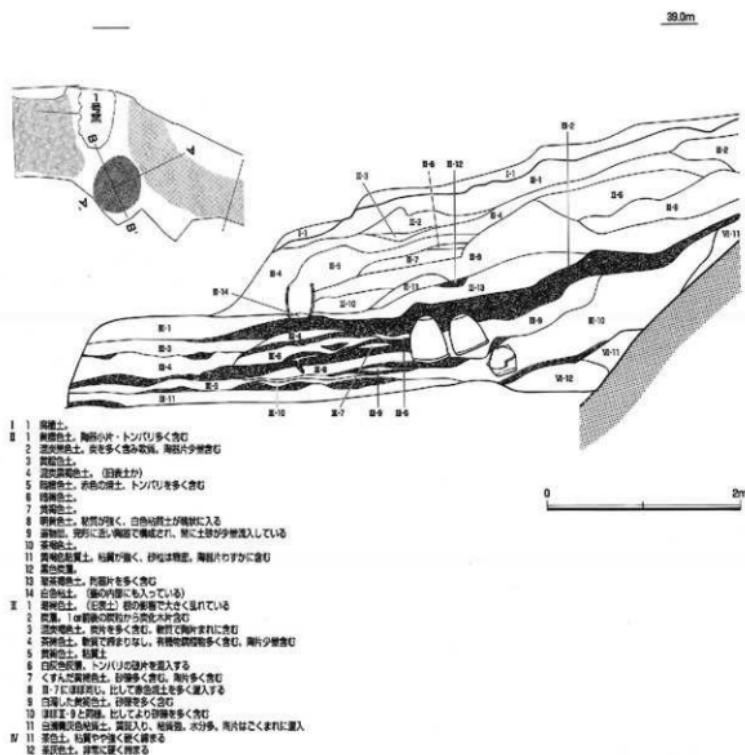
(物原採集遺物) (第19～30図)

膨大な物原廃棄物には、この窯で生産された陶器類・瓦類、焼成や成型に関連する窯道具、他に窯場で働く人々が持ち込んだ食器や日用品など、様々なものがあった。

生産陶器・瓦類については、現地においておおよその分類(壺類・擂鉢・片口鉢・捏鉢・壺・



第12図 大田屋窯跡物原A-A' ライン土層断面図 S = 1 / 80



第13図 大田屋窯跡物原A-A' ライン土層断面拡大図 S = 1/50

瓶・蓋・その他)を行い、代表的なものを採集した(第19図～27図)。いずれもこれまでに報告されている近代の石見焼製品群から逸脱するものではなく、大型・小型品を問わず来待釉、透明の並釉が用いられる陶器である。この窯の特徴としては、第19図のような皿・碗と言った小型品が一定程度の割合を占めていることであろうか。小型品や壺・蓋には鼻須やコバルトで絵や文字が描かれ

ているものが多く見られる。また徳利や瓶には、注文先の店名が描かれたものがある。瓦では、装飾的な鬼瓦や鳥伏間といったものが見受けられ、製作する職人の技術の高さをうかがうことができる。ユニークなものとしてはカエル形や鳥形（？）、来待釉かけされた陶製人形や、海岸部の漁師から注文されたのか陶器製の漁網錘も見られた（写真P L21）。甕や盛り鉢の底部には窯印の刻印が押されたものが認められた（写真P L18）。

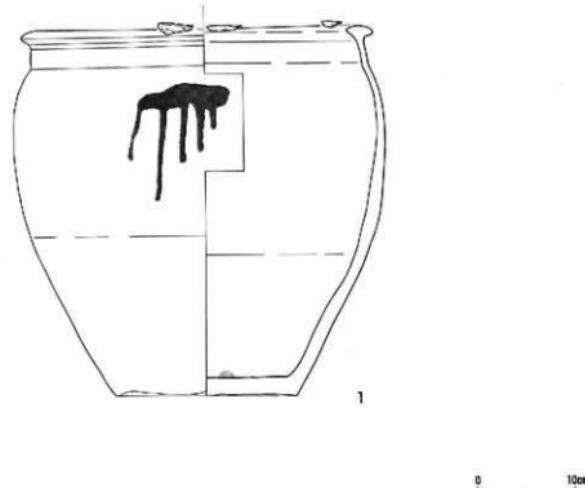
窯詰め道具としては（第29図～30図）陶器焼成台であるハリ、トチン、ヌケ、堀などに使用するハセドロ・ハセツチ、瓦詰め作業時に使用するハセ・モミツチが多く採集された。他に十能、硯、当て具、素焼きの堀端、盛り鉢などが採集されている。これらの道具はいずれも石見焼と思われ本窯で必要に応じて製作されたものであろう。

持ち込まれた焼き物では、磁器が採集されている（写真P L22）。肥前系がほとんどで、瀬戸・美濃系は2点のみであった。他に焼成窯不明の磁器も見られた。これらの磁器は幕末～明治・大正期のものである。

（4）平坦面について

丘陵の頂部を削平・盛土して広い平坦面を造り出している。調査区外を含めると幅50m、長さ100mに渡って平坦面が造り出され、その中央に幅約2mの通路が貫き、東側斜面には1号窯が、西側には2号窯が配されている。

調査では、このうち東側斜面のわずかに一部が対象となった。平坦面は盛土造成や不良製品の廃

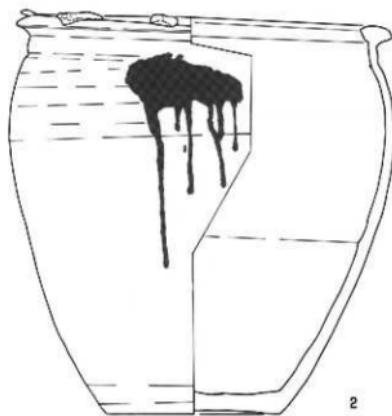


第14図 大田屋窯跡物原5出土遺物実測図① S=1/5



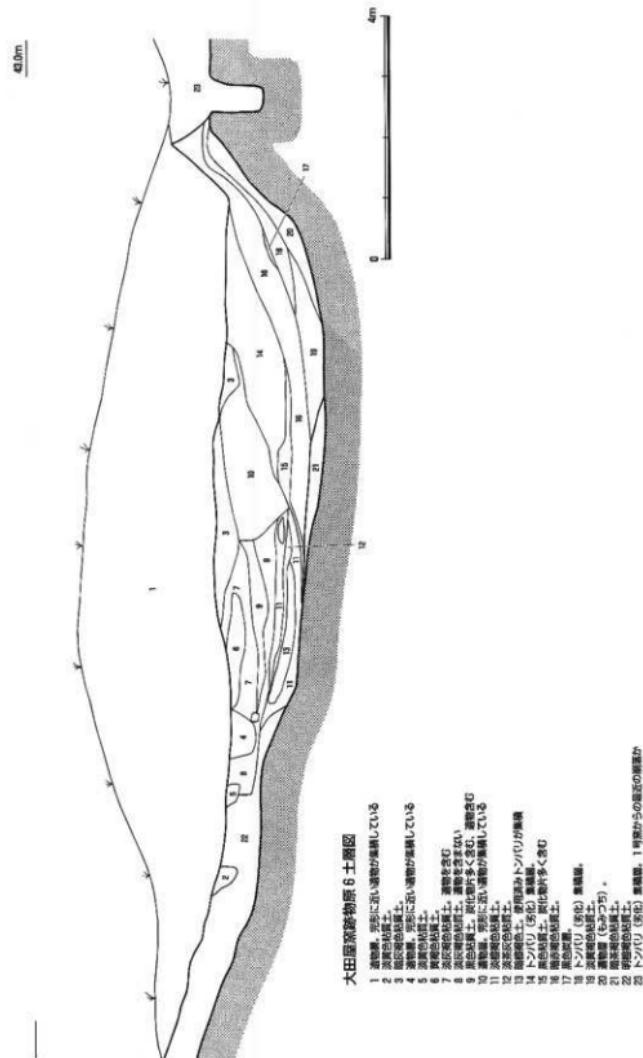
0 10cm

第15図 大田屋窯跡物原5出土遺物実測図② S = 1 / 5

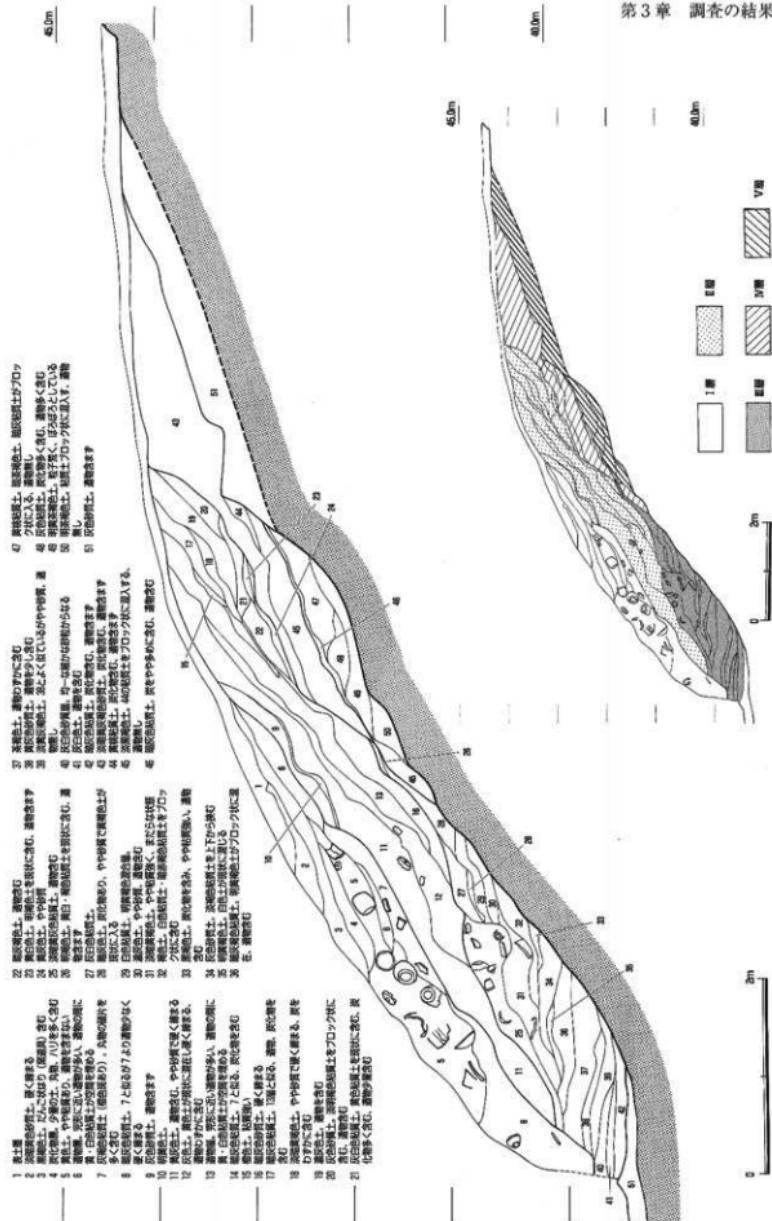


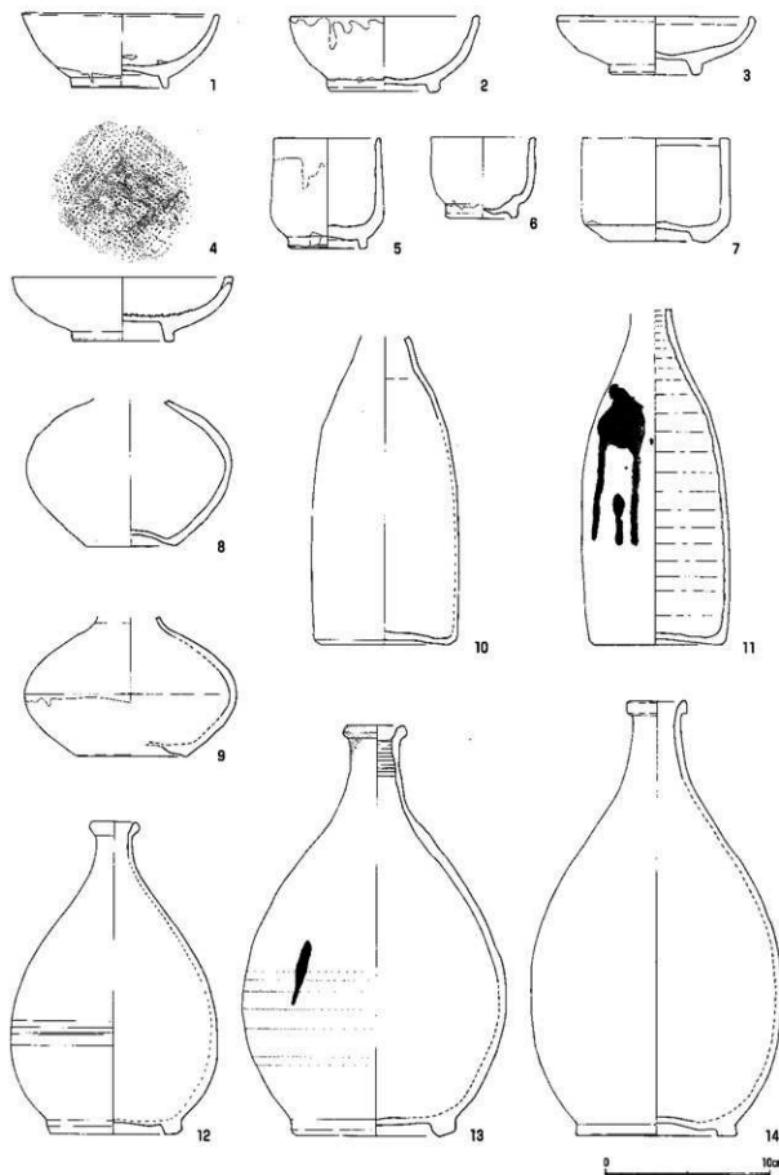
0 10cm

第16図 大田屋窯跡物原5出土遺物実測図③ S=1/5

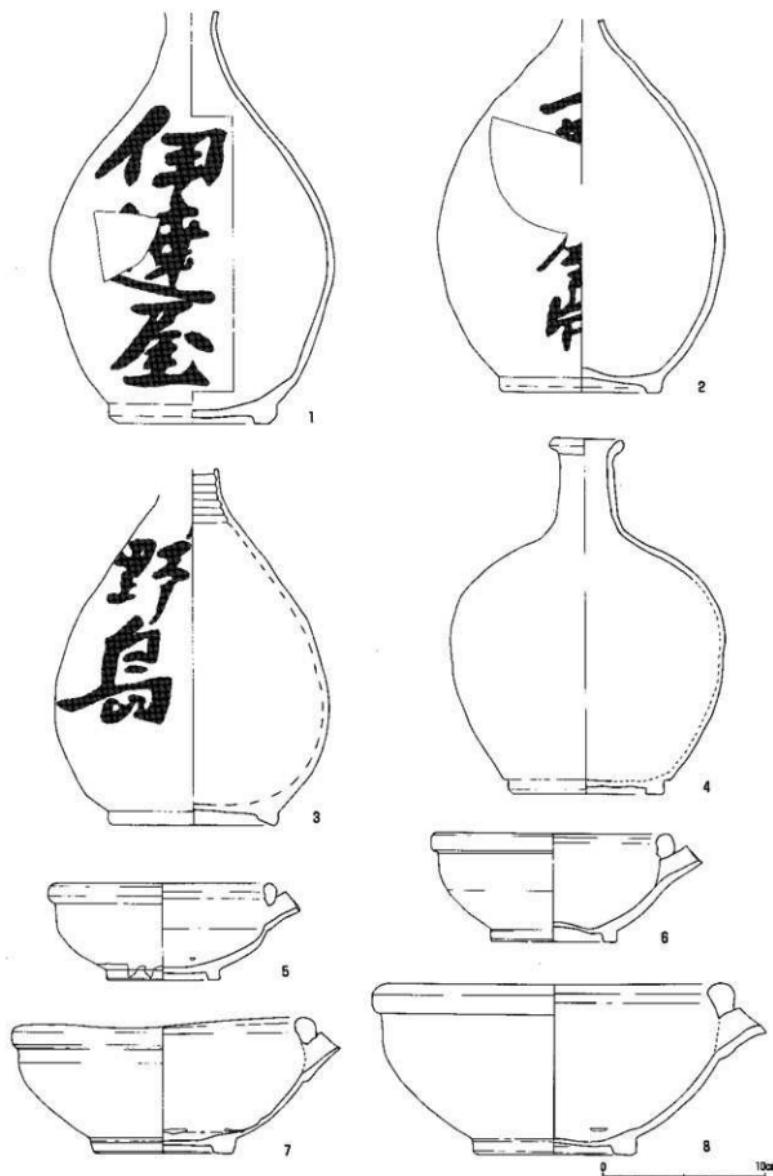


第17図 大田屋窯跡物原 6 D-D' ライン土層断面図 S = 1 / 80

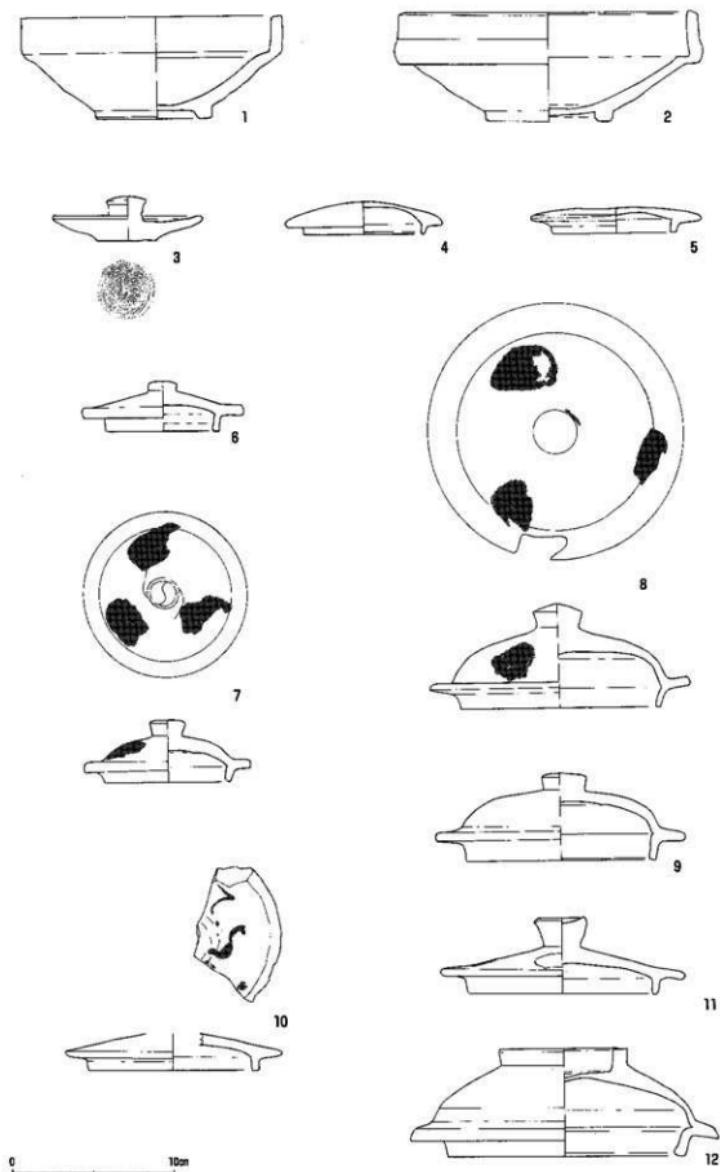




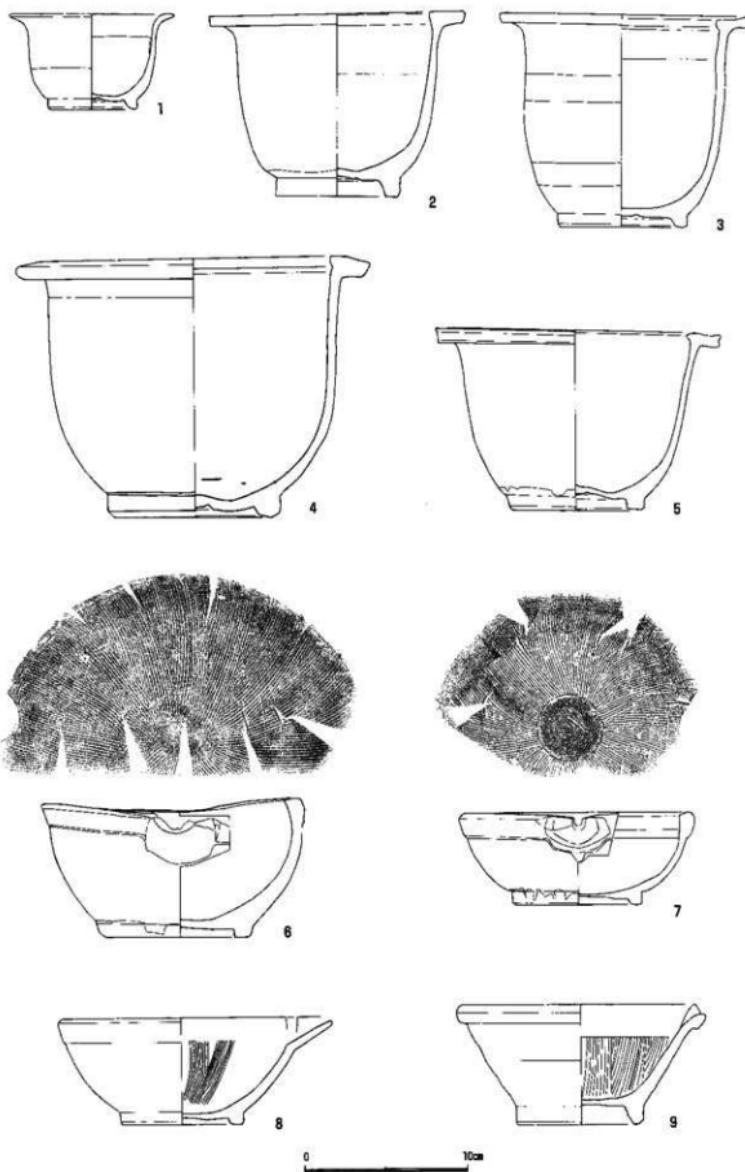
第19図 大田屋跡物原採集遺物実測図① S = 1 / 3



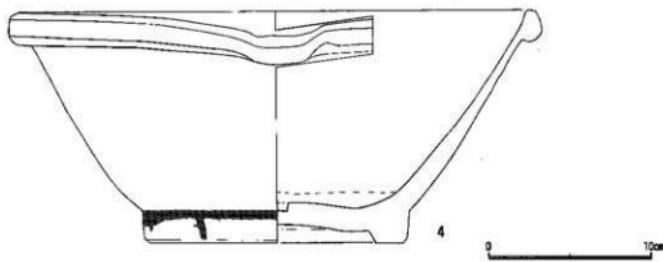
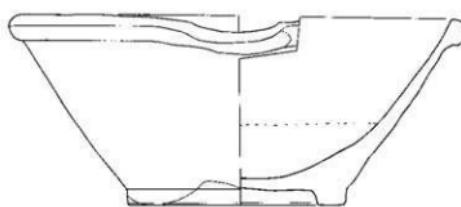
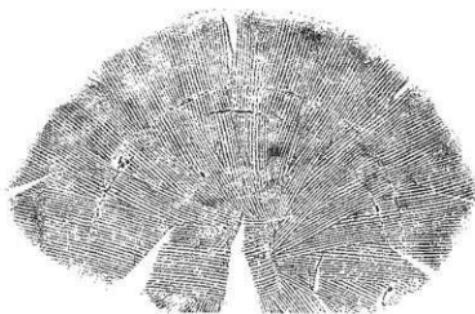
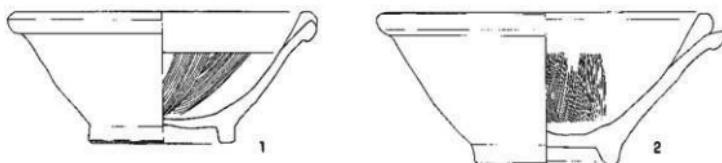
第20図 大田屋窯跡物原採取遺物実測図② S = 1 / 3



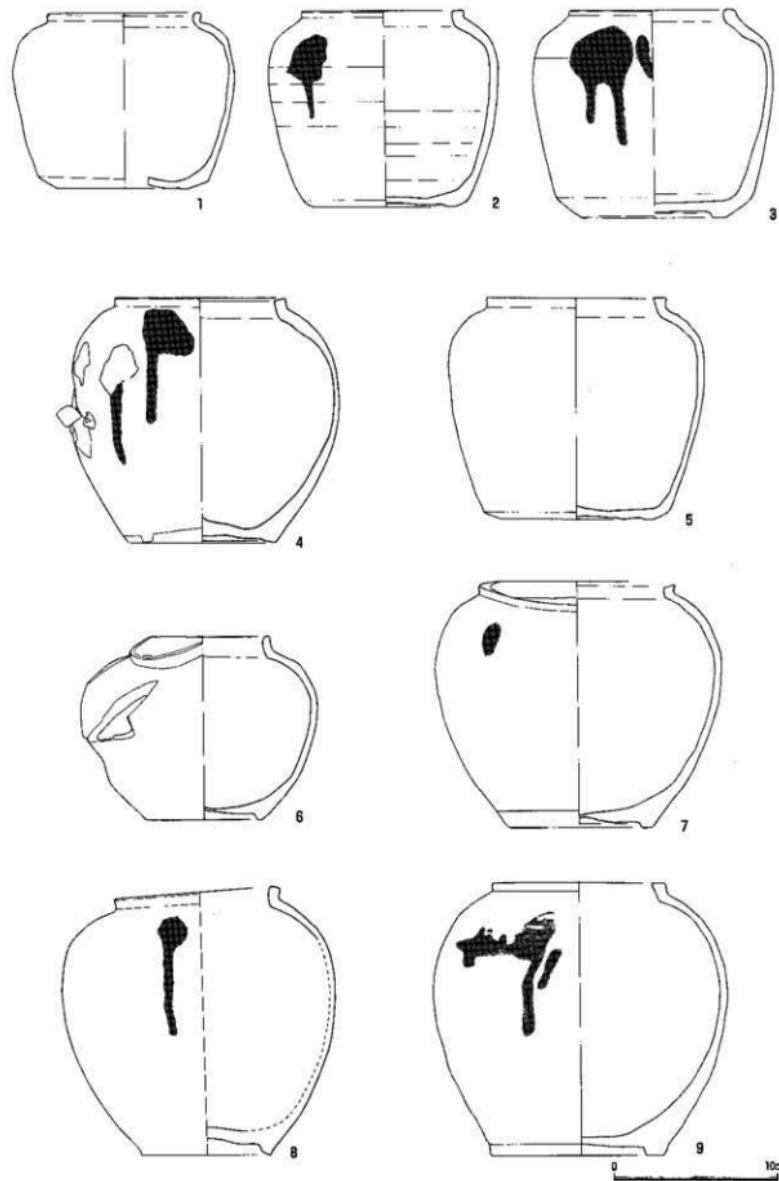
第21図 大田寺跡物原採取遺物実測図③ S = 1 / 3



第22図 大田屋窯跡物原探集遺物実測図④ S = 1 / 3

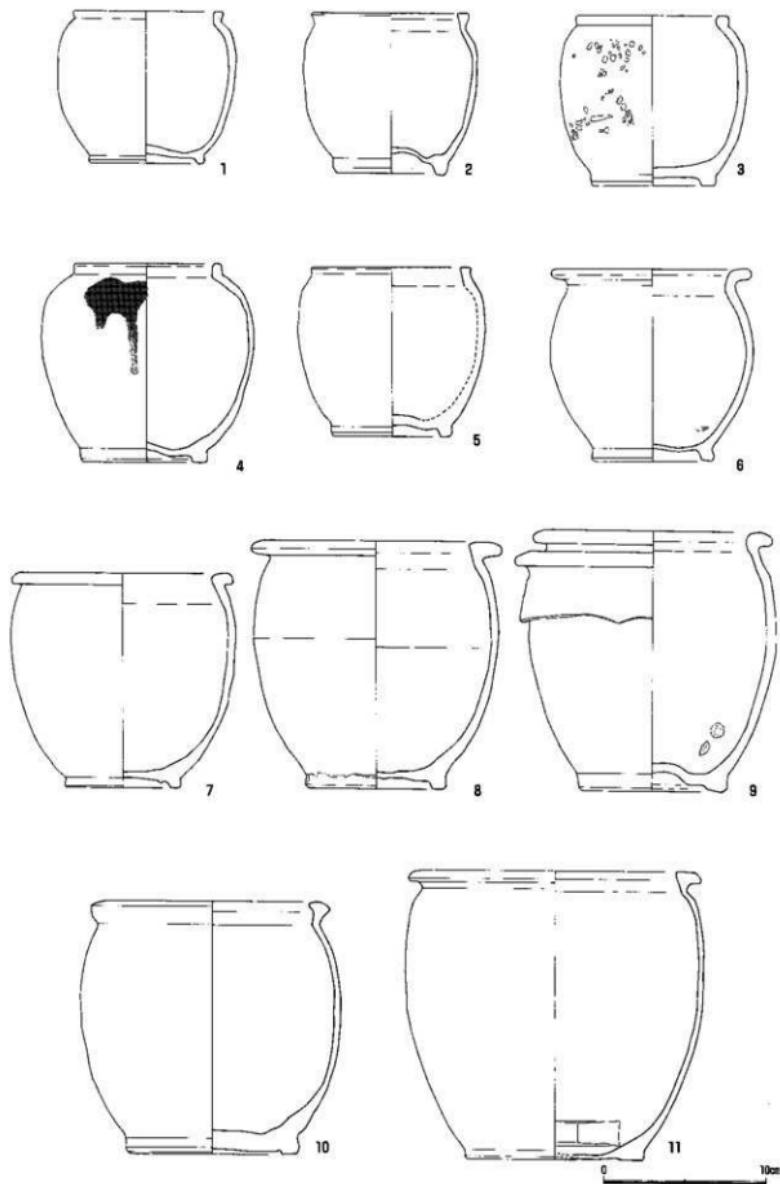


第23図 大田屋窯跡物原探集遺物実測図⑤ S = 1 / 3

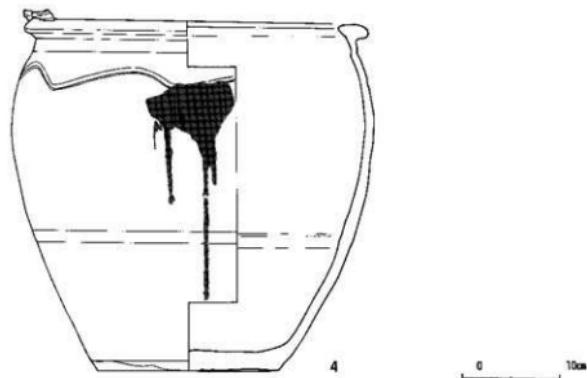
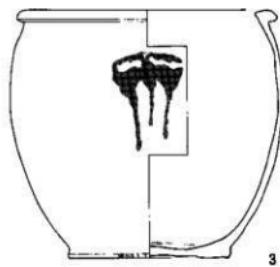
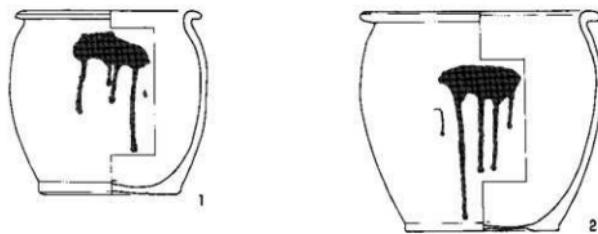


第24図 大田屋跡物原採集遺物実測図⑥ S = 1 / 3

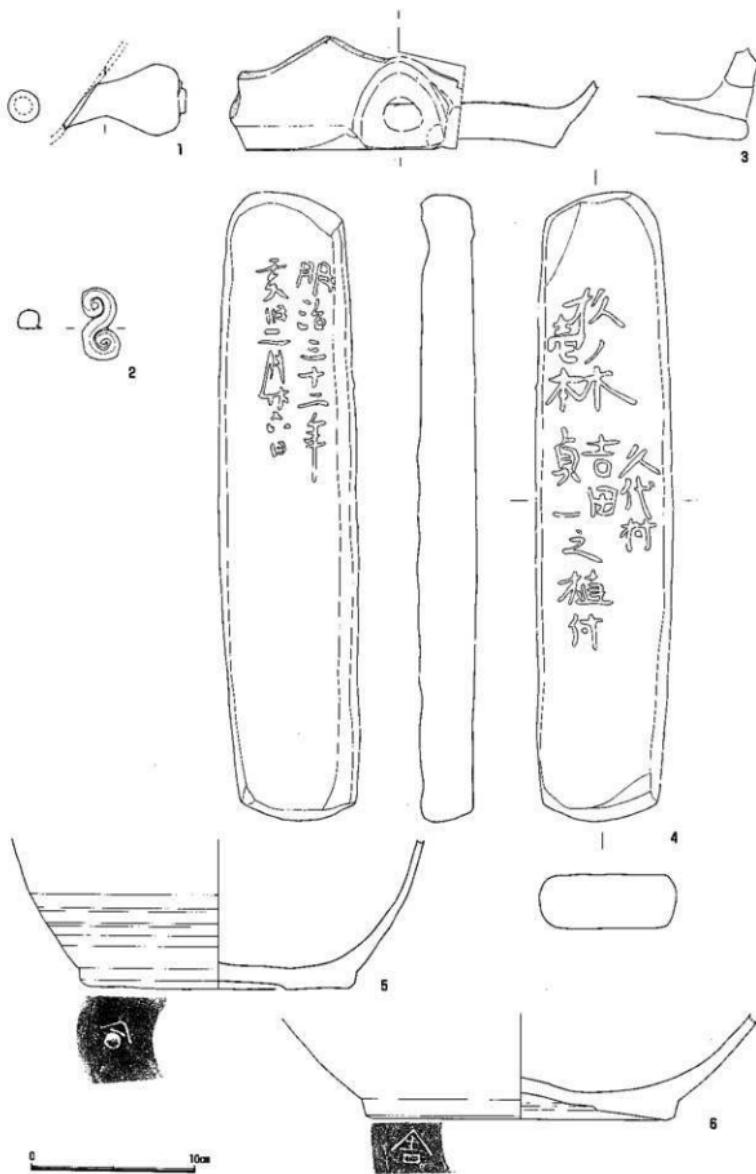
第3章 調査の結果



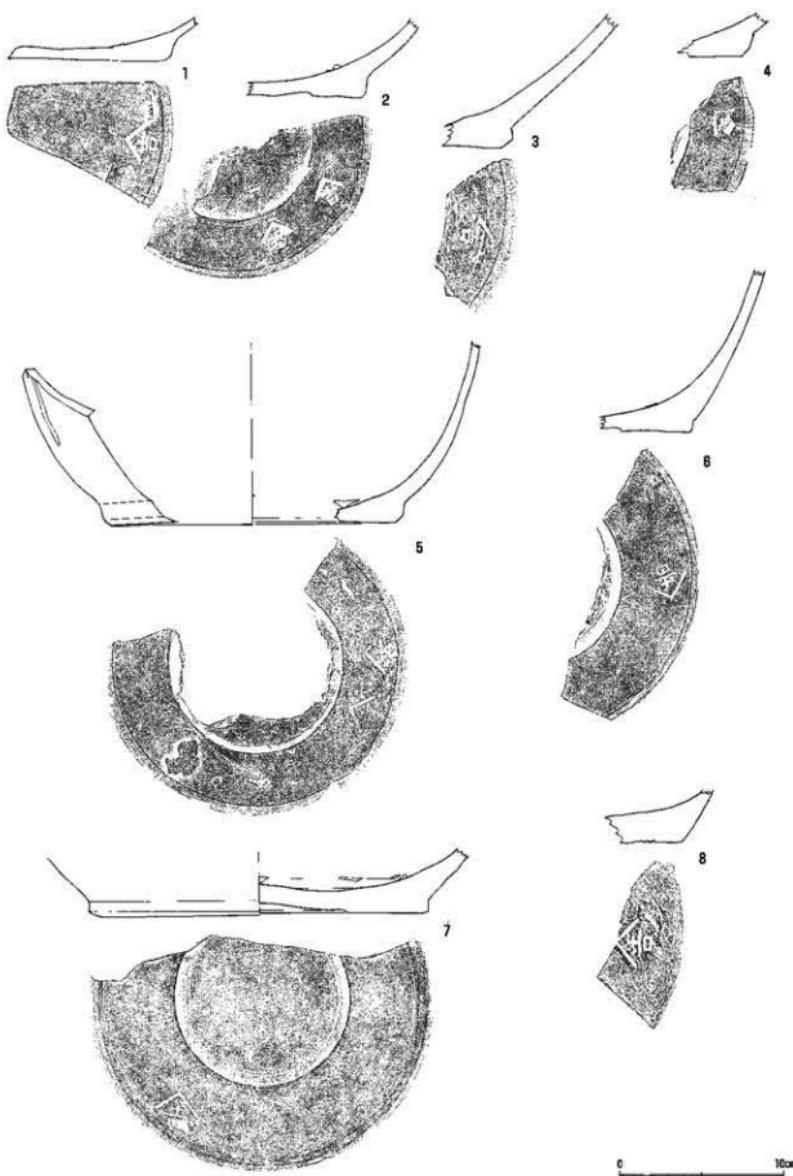
第25図 大田屋跡物原探集遺物実測図⑦ S = 1 / 3



第26図 大田屋窯跡物原採集遺物実測図⑧ S = 1 / 5

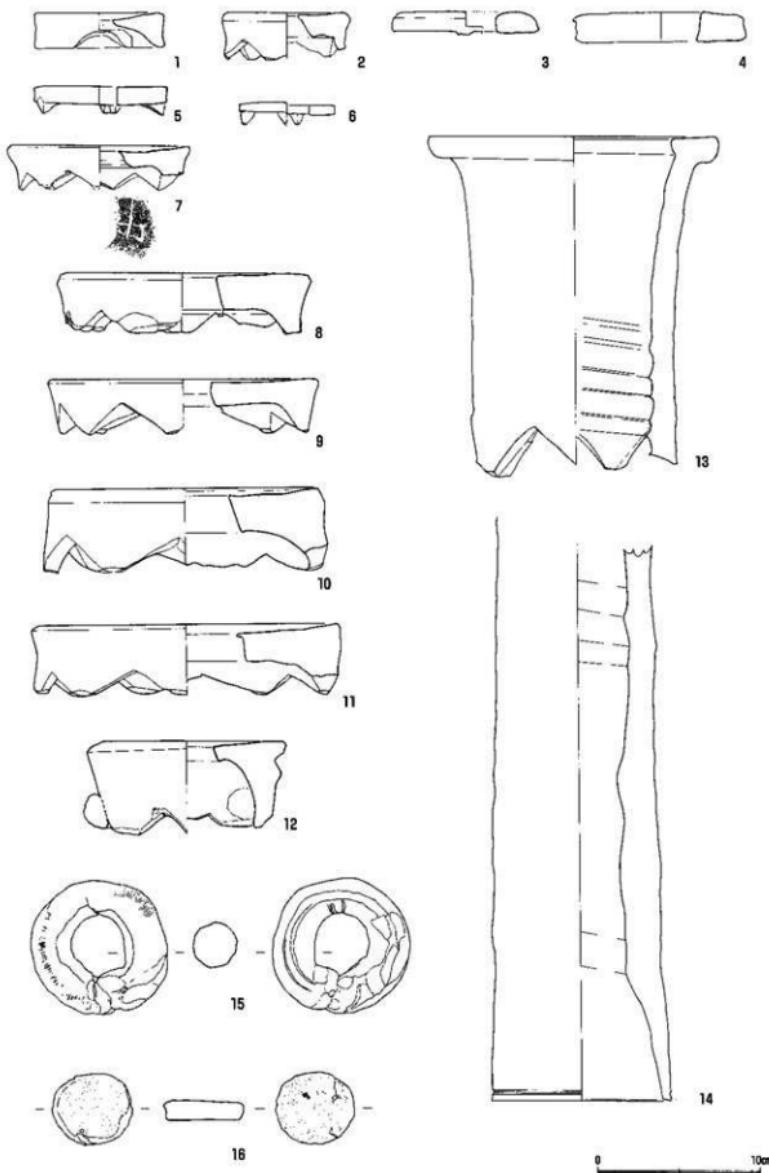


第27図 大田屋跡物原探集遺物実測図⑨ S = 1 / 3

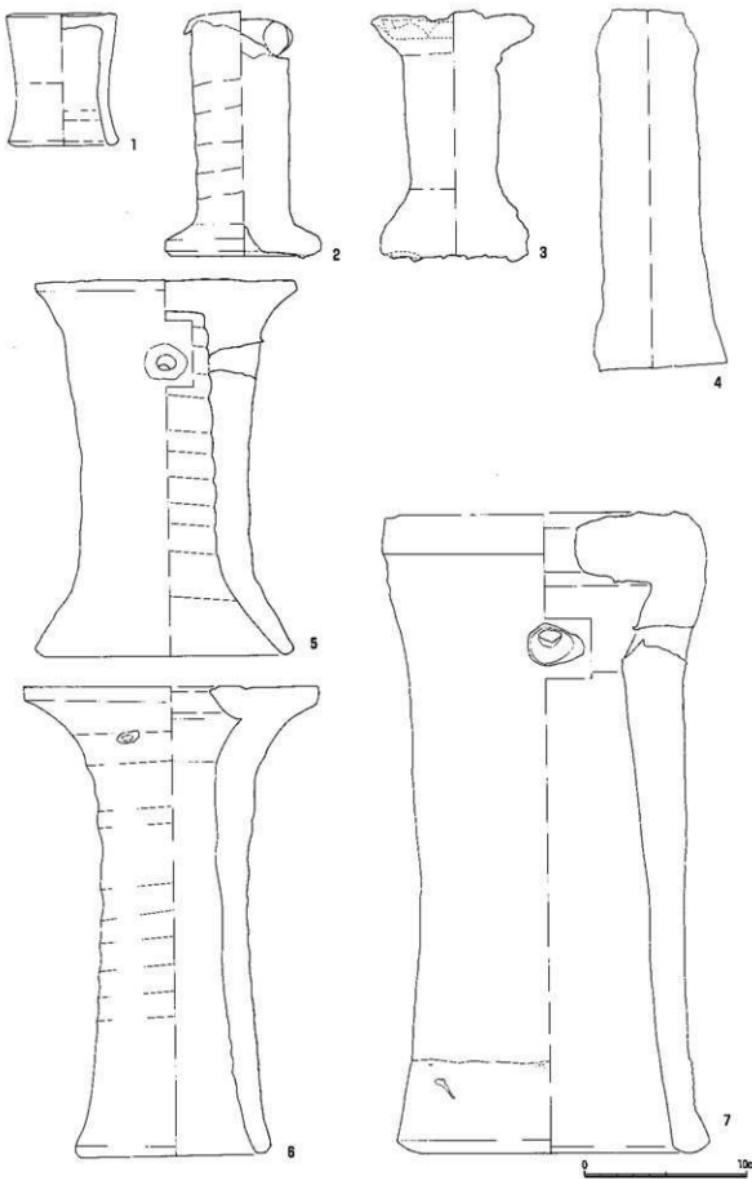


第28図 大田屋窯跡物原採取遺物実測図① S = 1 / 3

第3章 調査の結果



第29図 大田屋跡物原探集遺物実測図① S = 1 / 3



第30図 大田屋窯跡物原採集遺物実測図② S = 1 / 3

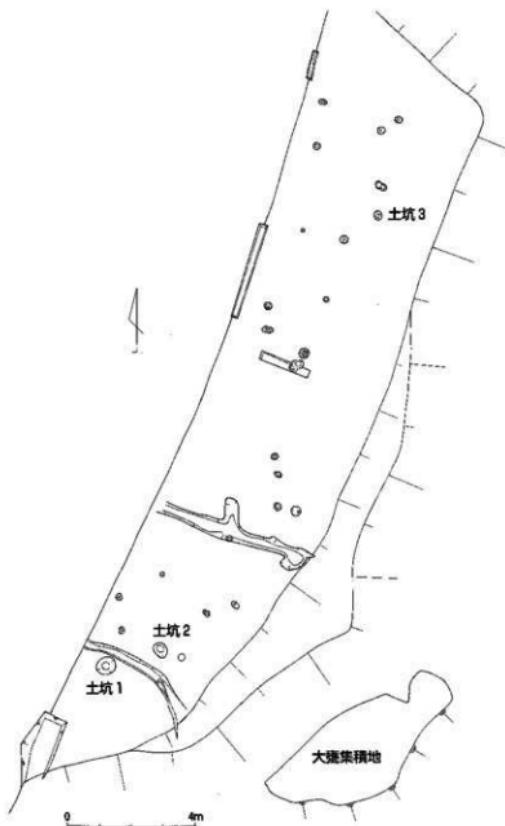
第3章 調査の結果

棄によって徐々に谷側へ拡張、せり出していくよう、二面を遺構面として捉えることができた。

上層である第1面は、平らに整地された面から、溝状遺構や、ピット、土坑を検出した。土坑1は未使用の瓦窯詰め道具が集積してある80cm×70cm深さ20cmの浅い擂鉢状の土坑である。土坑2は80cm×60cm深さ50cmの素掘り土坑である。土坑3は大甕が埋め込まれた50cm×50cm深さ65cmの土坑である。これらは製作作業に関連したものと思われる。また、後に述べる平坦面第2面の建物跡1が埋没した所には完形の大甕や捏鉢等が多数集積されていた。

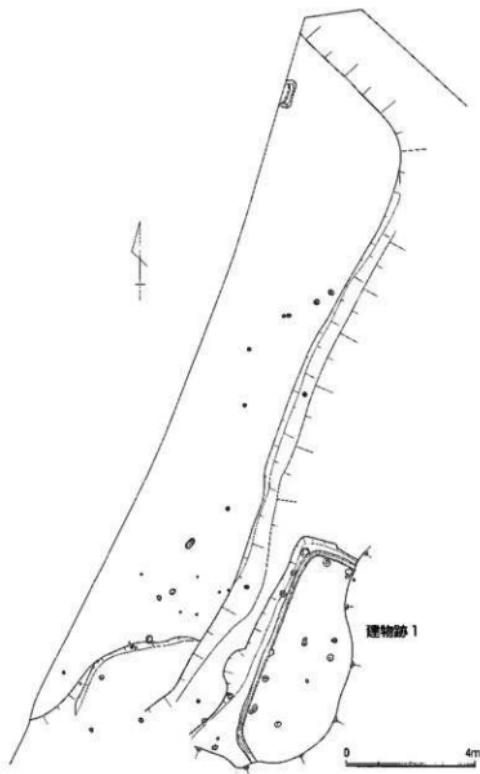
第2面は上層で検出した第1面の下層である。第1面と第2面の間に、陶器の胎土となる白色粘土や胎土に混入する砂粒などを多く含む土に陶器の小片を含む土層や、陶器を全く含まない褐色の烟作でもされたような厚い造成土で造成されていた。

第2面では、ピット多数、土坑4、建物跡1が検出された。建物跡1は斜面の中段を鐘壺状に削

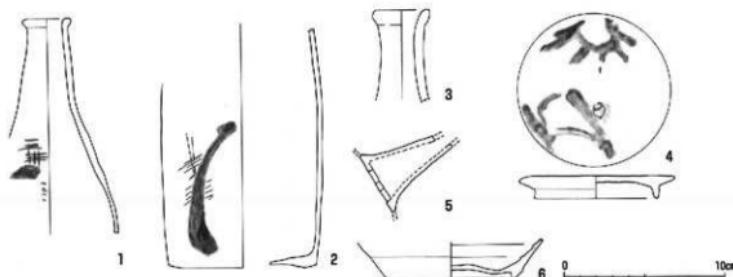


第31図 大田屋窯跡平坦面第1遺構面遺構配置図 S = 1 / 150

り出して造られた加工段をさらに大きくL字状にカットして造られている。この壠塙状の加工段は幅約1mで、一端は建物跡1で終結し、一端は緩やかな傾斜を持って1号窯北側の作業場へと通じており、1号窯との作業場として同時期に使用されたようである。建物跡1は、柱跡と思われるピラミッドはいずれも直径約20cmと小型であり、小規模な掘立柱建物があったと思われる。検出した建物跡1とはやや軸を異にして幅20cm深さ10cmの浅い溝跡3を検出しておらず、建て替えたものと思われる。床面からは第33図のような陶器片が出上しているが、この建物で行われた作業を想定させ得るものではなかった。



第32図 大田屋窯跡平坦面第2造構面造構配置図 S = 1/150



第33図 大田屋窯跡建物跡出土遺物実測図 S=1/3

第3節 尾根上調査区

尾根上調査区は、1号窯のある東側斜面調査区の西側、標高66mの丘陵頂部に設定した調査区である。調査前の観察で、2m×3m程の窪地状の地形や斜面をL字状にカットした加工段状の地形が認められたため、製作関連の作業場が存在した可能性が考えられ調査を行った。

その結果、道路状遺構1、池状遺構1とこれに関連した作業場としての段状遺構1を検出した。

(1) 道路状遺構（第34図）

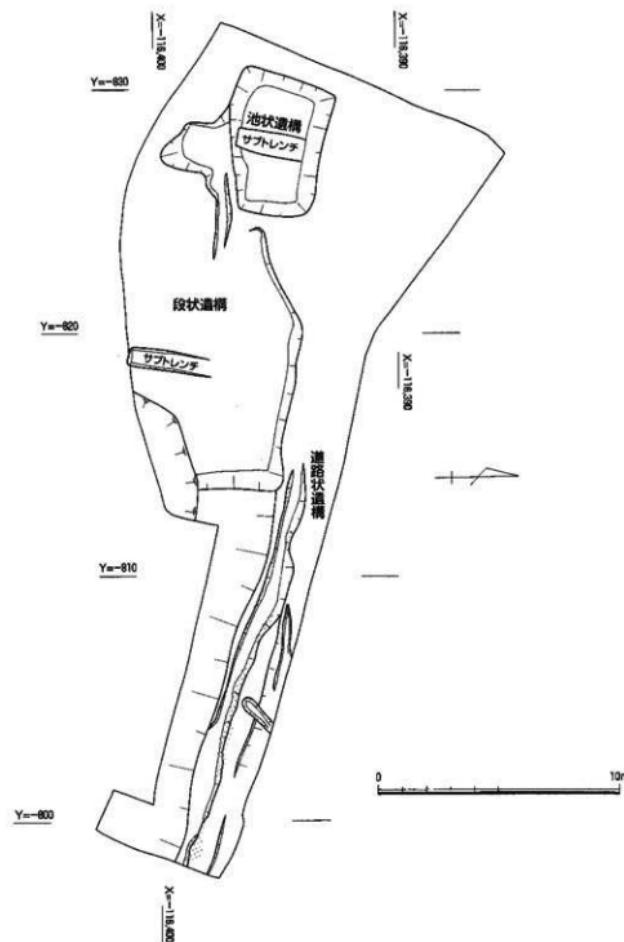
細い尾根筋を削平・盛土によって幅1～2m長さ19mに渡って造成している。明瞭な削平・造成の痕跡は認められなかった池状遺構・加工段状遺構の周辺は、造成の痕跡は認められなかったものの、緩やかな自然地形を利用して通路として機能していたと思われる。盛土の土留めとして、窯道具のハリを多く使用している（第34図のスクリーントーン部分が土留め遺構）

(2) 池状遺構（第35図）

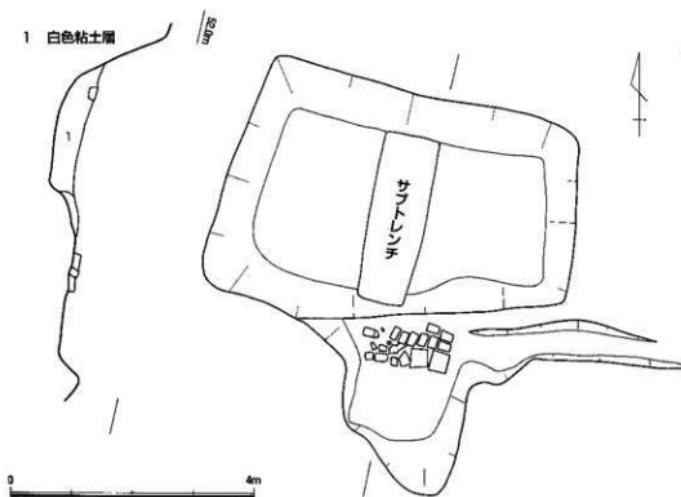
尾根の最も高い位置で検出した。幅3m×2m深さ1.7mの長方形の素掘りの土坑に不整形の深さ0.5mの浅い土坑が附属したもので、附属土坑の底には窯に使用されたトンバリが転用され、平らに整えられている。附属土坑は池状遺構の東側の段状遺構と細い通路でつながっている。池状遺構の内部には混入物の少ない白色粘土が堆積しており、粘土の精製の作業を行ったものと思われる。池状遺構の西側の調査区外には同様の窪地がいくつかあり、製品の工程によりこれらの池を使い分けて粘土の精粗を分けたと思われる。池状遺構からは第36図の陶器が出土している。

(3) 段状遺構（第34図）

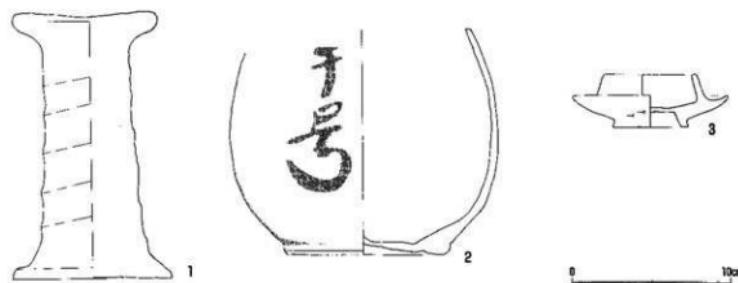
池状遺構の東にある幅11m×7.8mの平坦面である。斜面をL字状にカットし、谷側に盛土を行って平坦面を造り出しているが他に明瞭な遺構は検出されなかった。池状遺構とあわせて作業場として機能していたものであろう。



第34図 大田屋窯跡尾根上調査区遺構配図 S = 1/200



第35図 大田屋窯跡池状造構実測図 S = 1 / 80



第36図 大田屋窯跡池状造構出土遺物実測図 S = 1 / 3

第4章 まとめ

前章までに述べた大田屋窯跡の成果をまとめると次のような。

- ①発見された窯跡は2基（1基は調査区外=2号窯）であり、いずれも連房式登り窯である。1号窯より2号窯の方が平面規模・造成規模ともに大きい。
- ②1号窯では、窯本体・作業場・陶器を焼成した物原が同一丘陵上にまとまって配置されていた。
- ③1号窯・2号窯で生産されたものは、陶器では壺・片口・指鉢・捏鉢・壺類がほとんどを占めるが、瓶・楕円・皿・徳利といった小型品も出土している。また1号窯の初期には瓦も生産されていたことが判明した。
- ④操業年代は、物原から出土した他窯搬入磁器の年代幅が幕末～大正期を中心とする時期であること、1号窯操業時の物原から「明治三十二年」銘のある陶板が出土していること、聞き取り調査で2号窯については昭和20年頃には既に廃窯され荒廃していたことをあわせて考えると明治・大正期を中心に操業を行ったものと見られる。

上記①～④の事項を検討するにあたって、近年の近世後半以降の石見焼の研究動向を見てみると、地元研究者により文献史料を援用しながら丹念な聞き取りと分布調査が行われ、窯跡の分布状況をまとめたり、地域ごとの製品の変遷や特徴などの研究が行われている。これらの研究がきっかけとなつて石見焼が文化財として取り扱われるようになったことは意義深く、少ない発掘調査による成果を補う重要な資料にもなっている。また、発掘調査についてみると、1980年代以降、現在までに本遺跡を含めると15例の調査例が知られており、これらの遺跡の年代は、近世後半から昭和30年代までの幅広い年代にわたっている。文献6では発掘された陶器窯を中心に立地や関連遺構、陶器の変遷の検討が行われ、明治期の終わり頃を境に主要製品にそれ以前と異なる傾向があり、窯の規模も大きくなることが指摘されている。この要因としては石見焼製陶業組合の組織化に伴う販路拡大や規格化があげられている。

これらの研究を踏まえ大田屋窯跡についてみると、①で述べた窯本体の規模の違いは1号窯と2号窯の築造時期の違いを表しており、1号窯がより古い時期のものであることが想定されよう。③の本窯製品では、壺・指鉢・片口といった主要製品を文献6で示す陶器の変遷に当てはめると、明治末期以降の特徴を備えたものであることが分かる。一方、他窯搬入磁器から推定される年代幅からいうと幕末～大正期という時期幅があり、陶器の年代と他窯搬入磁器の年代の間には若干の隔たりがあることになる。これは他窯搬入磁器の生産された年代と実際に使用された年代の違いとも考えられようが、当窯においては明治末年以前に、既に主要製品の規格化が進んでいたことを表すものであり、他窯搬入磁器の年代にあわせた築窯年代の見直しも必要となるのではないかと思われる。また規格品とは別に、直接注文の特注品と見られる独自性の強い製品も見られ（第19図1～7などの小型品）、この両方を生産していたということが大田屋窯の特徴と言ふことができよう。

石見焼生産遺跡の発掘調査は、「物原」と呼ばれる不良製品廃棄場にある陶器等の量が膨大であることや窯の規模・構造が大きく複雑であることなどから、通常の遺跡の発掘調査の手法をそのまま用いることが困難なことが多い。しかし、特に明治期末以降の新しい窯跡では、事前の聞き取り

調査で多くの情報を得ることが可能であれば、物原の製品を部分回収に留めたり、回収する際の手段に重機を用いたりするなど、調査に要する労を省力化することは可能であろう。窯の築造年代や操業時期、製品の特徴や傾向を明らかにすることを目的とした効率的な調査を行う必要があるのでないだろうか。

石見焼については、これまで述べたように調査例は乏しく、研究の途についたばかりであるため、起源はおろか製品の特徴や変遷について言及できる資料も充分ではないのが現状であろう。これを補完するためには、今後は消費地遺跡から出土している近世陶器群の中から石見焼と思われるものを抽出し、その再評価を行う必要性があるとともに、さらに古い時期の窯跡が調査例の増加を待つて時代を追つての製品群の変遷を検討する事も必要があるのでないだろうか。

註

- (1) 主なものに文献9、文献10、文献16などがある。
- (2) 「主要製品の異なる傾向」とは、片口・擂鉢・甕といった主要製品が大正期以前の製品では形態や釉薬・胎土が窯によって異なる特徴の製品があつたり時間的な変遷が追えるのに対し、大正期以降の製品では現代のもので今まで食器・樂器などの特徴が希薄で統一的な規格で生産されている、ということである。具体的には片口鉢では「器高に対し口径が低くなる」、「高台は径が広がり高さは低くなる」、「口縁部の内縁は折り返した縁がきれいに揃っている」、「注口は短く切られ角度も低くなる」「透明度の高い並釉は高台と底部を除く全面にかけられる」ことなどで、擂鉢では「(古い時期のものと比べると) 口径に対し器高の低いプロポーションになる」、「口縁端部は玉縁状に肥厚する」「底部は中心が盛り上がり、見込みには高台の跡が残る」、「(釉薬は) 赤みのある外待釉が高台と底部を除く全面にかけられる」ことなど、甕では「口(=口縁部)は大きく寸胴気味」である点である。

参考文献

- 1 熊山貴保「石見における近世の窯業生産」『八雲立つ風土記の丘No122・123』1993
- 2 建設省浜田工事事務所・島根県教育委員会『一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書I』(鹿伏山・半田浜西・二宮C遺跡・久本奥窯跡)』1995
- 3 建設省浜田工事事務所・島根県教育委員会『嘉久志遺跡・飯田C遺跡・古八幡付近遺跡-一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書II-』1997
- 4 建設省浜田工事事務所・島根県教育委員会『神主城跡・室町商店裏遺跡・古八幡付近遺跡-一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書III-』2000
- 5 国土交通省・島根県教育委員会『忠良遺跡・堂々岸窯跡・上条遺跡・水口(三日)・神社跡(上条占墳)・立女遺跡-一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV-』2001
- 6 国土交通省浜田工事事務所・島根県教育委員会『石見焼関連遺跡調査報告書1(飯田A遺跡・長東坊跡)・一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V-』2001
- 7 国土交通省浜田工事事務所・島根県教育委員会『石見焼関連遺跡調査報告書2 上府八反原窯跡(佐々木窯跡)・一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI-』2001
- 8 江津市教育委員会『平成3年度埋蔵文化財調査報告書』1992
- 9 江津市文化財研究会『石見湯 第十・十一号』1986
- 10 江津市文化財研究会『石見湯 第十三号』1988
- 11 烏根県教育委員会『島根県遺跡地図II(石見編)』1992
- 12 烏根県教育委員会『島根県生遺跡分布調査報告書III-窯業関連遺跡-』1985
- 13 烏根県教育委員会『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』1992
- 14 浜田市『浜田市誌 下巻』1973
- 15 原 祐司「生湯窯跡」『八雲立つ風土記の丘No122・123』1993
- 16 半田正典『石見粗陶器考』1979
- 17 宮本徳昭「江津市の石見焼」『八雲立つ風土記の丘No122・123』1993

大田屋窯跡出土遺物観察表(1)

発掘場所	号	真	出土地点	種	形	法 寸法 (cm) 口径 底径 高さ	生土 陶 瓦 瓦	種 類	その 他
第10回 I	PL 9	1号窯	赤褐色土	陶器	壺	7.2	—	1.9	杏
	2	PL 9	1号窯	赤褐色土	陶器	壺	7.7	—	1.7
	3	PL 9	1号窯	赤褐色土	陶器	壺	7.2	—	1.6
	4	PL 9	1号窯	赤褐色土	陶器	壺	9.1	—	1.9
	5	PL 9	1号窯	赤褐色土	陶器	壺	8.6	—	4.0
	6	PL 9	1号窯	赤褐色土	陶器	壺	11.4	—	5.8
	7	PL 9	1号窯	赤褐色土	陶器	片口壺	11.0	7.2	6.8
	8	PL 9	1号窯	赤褐色土	陶器	小壺	7.6	6.8	13.0
	9	PL 9	1号窯	赤褐色土	陶器	鉢	20.0	10.9	11.4
	10	PL 9	1号窯	赤褐色土	陶器	鉢	20.6	—	11.4
	11	PL 9	1号窯	赤褐色土	陶器	鉢	22.4	11.8	12.5
	12	PL 10	1号窯	赤褐色土	陶器	壺	28.0	—	—
	13	PL 10	1号窯	赤褐色土	陶器	壺	28.3	—	—
	14	PL 10	1号窯	赤褐色土	陶器	壺	30.4	—	—
第11回 I	PL 9	1号窯	赤褐色土	陶器	壺	8.4	—	1.7	杏
	2	PL 9	内部	水刷毛	陶器具	ハリ	9.6	—	2.7
	3	PL 9	1号窯	赤褐色土	陶器	壺	8.0	—	2.8
	4	PL 9	1号窯	赤褐色土	陶器	ハリ	12.1	—	3.7
	5	PL 9	1号窯	赤褐色土	陶器	ハリ	15.3	—	3.4
	6	PL 9	1号窯	赤褐色土	陶器	ハリ	14.8	—	2.5
	7	PL 9	1号窯	赤褐色土	陶器	ハリ	6.9	—	3.6
	8	PL 9	1号窯	赤褐色土	陶器	ハリ	7.0	—	4.3
	9	PL 9	1号窯	赤褐色土	陶器	ハリ	9.9	—	5.8
	10	PL 9	1号窯	赤褐色土	陶器	ハリ	9.0	—	5.8
	11	PL 9	1号窯	赤褐色土	陶器	ハリ	11.8	—	6.7
	12	PL 9	1号窯	赤褐色土	陶器	ハリ	9.3	—	4.3
	13	PL 9	1号窯	赤褐色土	陶器	ハリ	10.9	—	4.4
第14回 I	PL 10	物原V区		陶器	大	33.3	18.6	38.0	丸
									朱漆輪
第15回 I	PL 10	物原V区		陶器	大	35.0	19.3	37.8	丸
									朱漆輪
	2	PL 10	物原V区-11	陶器	大	34.2	17.4	39.7	丸
第16回 I	PL 11	物原5区		陶器	人型	32.0	18.2	36.5	丸
									朱漆輪
	2	PL 11	物原V区-11	陶器	大	32.0	18.0	40.4	丸
第19回 I	PL 11	1号窯I-1付五段土下		陶器	甕	11.8	3.8	4.6	壺
	2	PL 11	物原5区	陶器	甕	11.5	6.5	4.6	壺
	3	PL 11	物原5区土2	陶器	甕	11.7	5.2	3.6	壺
	4	PL 11	物原5区土3	陶器	甕	12.5	6.2	3.9	壺
	5	PL 11	1号窯之東裏支脚上	陶器	壺口	6.5	4.8	6.7	壺
	6	PL 11	物原5区11号以上	陶器	壺口	6.4	4.8	3.0	壺
	7	PL 11	物原5区11号以上	陶器	壺口	9.0	6.0	6.3	壺
	8	PL 11	物原5区	陶器	花瓶	—	3.4	—	壺
	9	PL 11	物原5区	陶器	花瓶	—	6.4	—	壺
	10	PL 11	物原5区	陶器	壺口	7.0	3.0	19.0	壺
	11	PL 11	物原5区	陶器	壺口	—	7.6	—	壺
	12	PL 12	物原V区ベルト内	陶器	壺口	2.7	2.7	19.3	壺
	13	PL 12	物原5区	陶器	壺口	3.4	9.0	23.1	壺
	14	PL 12	物原V区	陶器	壺口	3.4	9.6	26.6	壺
第20回 I	PL 12	物原5区		陶器	壺口	—	9.6	—	壺
	2	PL 12	物原V区	陶器	壺口	—	9.6	—	壺

大田屋窯跡出土遺物観察表(2)

周回各号	年 代 期	出土地点	種別	形	寸 量(cm)			陶土	釉	種類	その他の
					口径	底径	高さ				
3	P.L12	物原Ⅱ区	陶器	瓶	—	10.4	—	青	—	直輪	
4	P.L12	物原Ⅰ区黄土塗下	陶器	瓶	4.0	9.5	21.8	青	—	直輪	
5	P.L12	1号窯大口付灰土塗下	陶器	片口鉢	7.2	6.7	5.9	青	—	直輪	
6	P.L12	1号窯大口付灰土塗下	陶器	片口鉢	14.0	7.5	6.7	青	—	直輪	
7	P.L12	1号窯大口付灰土塗下	陶器	片口鉢	17.2	8.4	7.8	青	—	直輪	
8	P.L12	1号窯大口付灰土塗下	陶器	片口鉢	20.5	9.5	10.5	青	—	直輪	
第21回1	P.L12	物原Ⅱ区灰土塗下	陶器	鉢	16.0	7.1	6.2	青	—	直輪	
	2	物原Ⅱ区立成土2	陶器	鉢	18.5	7.4	5.9	青	—	直輪	
3	P.L13	1号窯北側窓側削り	陶器	片口皿	3.6	—	2.7	青	—	黒色釉	
4	P.L13	物原5区	陶器	盤	7.3	—	2.0	青	—	黒色釉	
5	P.L13	物原5区	陶器	盤	6.8	—	1.5	青	—	黒色釉	
6	P.L13	物原5区ベント内	陶器	盤	6.2	3.0	—	青	—	黒色釉	
7	P.L12	物原5区	陶器	盤	—	3.7	3.8	青	—	直輪	
8	P.L13	物原5区	陶器	盤	11.7	—	6.4	青	—	直輪	
9	P.L13	1号窯南側窓側	陶器	盤	11.6	—	5.4	青	—	直輪	
10	P.L13	物原5区	陶器	盤	—	—	—	青	—	直輪	
11	P.L13	1号窯裏1層	陶器	盤	11.6	—	4.6	青	—	直輪	
12	P.L13	1号窯大口付灰土塗下	陶器	盤	14.5	—	6.6	青	—	直輪	
第22回1	P.L13	物原5区1層以上	陶器	横木鉢	10.1	5.0	5.9	青	—	未特徴	
	2	物原5区1層以上	陶器	横木鉢	16.0	7.5	11.2	青	—	未特徴	
3	P.L13	物原5区ベルト内	陶器	横木鉢	15.4	7.6	13.0	青	—	未特徴	
4	P.L13	物原5区ベルト内	陶器	横木鉢	17.0	9.8	16.8	青	—	未特徴	
5	P.L13	物原5区	陶器	横木鉢	13.6	8.0	11.0	青	—	未特徴	
6	P.L13	物原5区	陶器	横木鉢	14.3	8.6	8.5	青	—	未特徴	
7	P.L13	1号窯大口付灰土塗下	陶器	横木鉢	13.8	7.4	5.7	青	—	未特徴	
8	P.L13	物原5区	陶器	横木鉢	14.6	7.6	6.5	青	—	未特徴	
9	P.L13	物原5区	陶器	横木鉢	14.5	—	—	青	—	未特徴	
第23回1	P.L14	物原5区	陶器	横木鉢	18.0	8.5	8.0	青	—	未特徴	
	2	物原5区	陶器	横木鉢	19.1	7.8	9.3	青	—	未特徴	
3	P.L14	物原5区	陶器	横木鉢	20.2	13.2	11.7	青	—	未特徴	
4	P.L14	物原5区 東西ベント	陶器	横木鉢	31.2	25.4	14.1	青	—	未特徴	
第24回1	P.L14	物原1区	陶器	小皿	9.1	—	10.7	青	—	直輪	
	2	物原1区	陶器	小皿	9.8	8.6	12.0	青	—	直輪	
3	P.L14	物原5区	陶器	小皿	8.0	8.8	12.6	青	—	直輪	
4	P.L14	物原5区ベルト内	陶器	小皿	10.5	9.1	15.0	青	—	直輪	
5	P.L14	物原1区	陶器	小皿	11.0	9.5	13.5	青	—	直輪	
6	P.L15	物原5区	陶器	小皿	8.1	6.9	11.1	青	—	直輪	
7	P.L15	物原5区	陶器	小皿	11.6	8.8	15.0	青	—	直輪	
8	P.L15	物原1区表1層の中	陶器	小皿	10.1	8.0	16.0	青	—	直輪	
9	P.L15	物原5区	陶器	小皿	10.7	10.0	16.6	青	—	直輪	
第25回1	P.L15	物原1区	陶器	小皿	9.2	6.8	9.3	青	—	直輪	
	2	物原5区1層以上	陶器	小皿	9.5	6.8	9.9	青	—	未特徴	
3	P.L15	物原5区	陶器	小皿	9.5	7.7	10.3	青	—	直輪	
4	P.L15	物原1区	陶器	小皿	9.0	8.2	12.2	青	—	直輪	
5	P.L15	物原1区	陶器	小皿	9.6	7.2	10.2	青	—	直輪	
6	P.L15	物原1区表1層の中	陶器	小皿	11.6	7.2	11.8	青	—	未特徴	
7	P.L16	物原1区	陶器	小皿	12.7	7.0	13.1	青	—	未特徴	
8	P.L16	物原5区	陶器	小皿	18.1	8.2	15.1	青	—	未特徴	
9	P.L16	物原1区	陶器	小皿	13.0	8.4	15.9	青	—	未特徴	
10	P.L16	物原5区	陶器	小皿	13.0	9.1	16.4	青	—	未特徴	
11	P.L16	物原5区	陶器	小皿	15.0	10.6	17.6	青	—	未特徴	
第26回1	S.H.8.5	物原1区	陶器	小皿	16.8	13.8	18.6	青	—	未特徴	
	2	直輪	陶器	中皿	—	—	—	青	—	未特徴	
3	P.L16	SM9.0	陶器	中皿	23.0	16.4	25.2	青	—	未特徴	
4	P.L16	SM2.6	陶器	大皿	29.2	18.5	35.3	青	—	未特徴	
第27回1	P.L17	物原5区1層以上	陶器	平鉢	—	—	—	青	—	未特徴	
	2	北朝漆油青白土	陶器	不明	—	—	—	青	—	黒色釉	往日分野
3	P.L17	物原5区	陶器	小火鉢	—	19.0	—	青	—	—	
4	P.L17	物原5区	陶器	手火鉢	38.3	8.6	3.3	青	—	—	

大田屋窯跡出土遺物観察表(3)

井戸番号	号 瓦	出土地点	種 別 瓦 器	法 量 (cm)	出土	共 有	そ の 他
			口径 底径 高さ	口径 底径 高さ	相	相	
5	P.L.18	物窯 5区	陶器 陶片	— 17.0 —	相	未持物	底部に泥跡あり
6	P.L.18	物窯 5区	陶器 陶片	— 17.9 —	相	未持物	底部に泥跡あり
第29回 1	P.L.18	物窯 5区	陶器 陶片	— 16.9 —	密	未持物	底部に泥跡あり
2	P.L.18	物窯 5区	陶器 陶片	— 8.2 —	相	未持物	底部に泥跡あり
3	P.L.18	物窯 5区	陶器 陶片	— 18.0 —	密	未持物	底部に泥跡あり
4	P.L.18	物窯 5区	陶器 陶片	— 20.4 —	密	未持物	底部に泥跡あり
5	P.L.18	物窯 5区	陶器 陶片	— 17.4 —	相	未持物	底部に泥跡あり
6	P.L.18	物窯 5区	陶器 陶片	— 17.4 —	相	未持物	底部に泥跡あり
7	P.L.18	物窯 5区	陶器 陶片	— 19.8 —	密	未持物	底部に泥跡あり
8	P.L.18	物窯 5区	陶器 陶片	— 21.1 —	相	未持物	底部に泥跡あり
第29回 1	P.L.19	平底窯 (東) 黒色土	陶器 陶片	8.1 — 1.7	密	—	脚は、はりつけ
2	P.L.19	物窯 2区	陶器 陶片	5.8 — —	密	—	脚は、はりつけ
3	P.L.19	物窯 5区	陶器 陶片	8.9 — 1.9	相	—	
4	P.L.19	物窯 5区	陶器 陶片	10.5 — 1.8	相	—	
5	P.L.19	物窯 2区	陶器 陶片	8.0 — 2.3	相	—	
6	P.L.19	物窯 5区(11号以上)	陶器 陶片	7.0 — 2.8	相	—	
7	P.L.19	物窯 2区(11号以上)	陶器 陶片	11.0 — 2.7	相	—	
8	P.L.19	1号窯 黒色瓦	陶器 陶片	15.4 — 3.7	相	—	
9	P.L.19	平底窯 (東) 黑色土	陶器 陶片	15.3 — 3.4	相	—	
10	P.L.19	1号窯 黒色瓦	陶器 陶片	16.0 — 5.1	相	—	
11	P.L.19	平底窯 (東) 黑色土	陶器 陶片	18.0 — 4.5	相	—	
12	P.L.19	物窯 5区	陶器 陶片	11.0 — 5.7	相	—	
13	P.L.19	物窯 2区	陶器 陶片	17.5 — 20.8	相	—	
14	P.L.19	物窯 6区	陶器 陶片	11.0 — —	相	—	
15	P.L.19	物窯 5区ベルト内	陶器 陶片	11.0 — —	相	—	手づくね
16	P.L.19	物窯 5区	陶器 陶片	11.0 — 1.2	相	—	
第30回 1	P.L.19	物窯 5区	陶器 陶片	6.7 6.0 8.1	相	—	
2	P.L.19	物窯 6区	陶器 陶片	5.7 6.8 15.0	密	—	
3	P.L.19	物窯 5区	陶器 陶片	9.4 8.9 14.5	密	—	
4	P.L.19	物窯 1区以上	陶器 陶片	8.2 21.6	相	—	
5	P.L.19	物窯 1区(1区以上)	陶器 陶片	16.0 14.5 22.9	相	—	
6	P.L.19	物窯 1区(1区以上)	陶器 陶片	18.0 11.0 28.7	相	—	
7	P.L.19	物窯 1区(1区以上)	陶器 陶片	18.7 16.9 39.0	相	—	
第33回 1	P.L.23	白色粘土層	陶器 陶片	— — —	密	—	未持物
2	P.L.23	H.S.B.01 深水	陶器 陶片	— 9.2 —	密	—	未持物
3	P.L.23	S.B.01 白粘土層	陶器 陶片	— 3.4 —	密	—	未持物
4	P.L.23	S.B.01 白粘土層	陶器 陶片	— — —	密	—	未持物
5	P.L.23	S.B.01 白粘土層	陶器 陶片	— — —	密	—	未持物
6	P.L.23	S.B.01 白粘土層	陶器 陶片	— — —	密	—	未持物
第36回 1	P.L.23	4区(北)表土層	陶器 陶片	9.0 9.9 16.5	相	—	
2	P.L.23	2区(北)表土層	陶器 陶片	— 9.8 —	相	—	
3	P.L.23	池内表土層	陶器 陶片	5.8 4.8 3.3	相	—	底面

大田屋窯跡出土遺物観察表<写真のみ掲載>(4)

井戸番号	井戸地点	高さ	器 様	法 量 (cm) 口径 底径 高さ	出土	共 有	そ の 他
P.L.20-1	物窯 6区	陶器片	陶器タキシ高さ小?	— — —	相	未持物	
P.L.20-2	物窯 1区(1区)	陶器片	陶器タキシ	— — —	密	未持物	
P.L.20-3	物窯 2区	陶器片	陶器タキシ?	4.6 — 6.4	密	なし(六成き)	手づくね
P.L.20-4	物窯 2区(1区)	陶器片	陶器かんもん	9.3 3.3 9.7	密	引手輪	ろくろ座の部品
P.L.20-5	物窯 5区(1区)	陶器片	高窯かんもん	4.0 4.0 2.3	密	—	引手輪
P.L.20-6	1号窯(北)表土層	陶器片	陶器かんもん	5.5 5.5 1.9	密	—	引手輪
P.L.20-7	物窯 1区	陶器片	陶器かんもん	4.2 4.2 1.9	密	—	引手輪
P.L.20-8	1区(北)表土層	陶器片	陶器片	— — —	相	未持物	
P.L.20-9	物窯 2区	陶器片	陶器片	— — —	相	なし(素焼き)	
P.L.20-10	大田屋丸山遺跡集中地	陶器片	陶器片	29.3 11.2 11.3	相	—	瓦焼成時に使用
P.L.20-11	1号窯(北)表土層	陶器片	陶器片	— — —	相	—	瓦焼成時に使用
P.L.20-12	1号窯(北)表土層	陶器片	陶器片	— — —	相	—	瓦焼成時に使用
P.L.20-13	1号窯(北)表土層	陶器片	陶器片	— — —	相	—	瓦焼成時に使用

第4章まとめ

地図番号	山土地点	高さ	谷幅	法面 式	量(%) 容積	粒度	岩相	その他の
P L20-14	1号赤系紫色土	別途凡	もみじロ	一	—	粗	—	西海岸時、山腹部に使用
P L20-15	1号赤系褐色土	別途凡	もみじロ	—	—	粗	—	東洋成時、山腰部に使用
P L20-16	1号赤系褐色土	別途凡	もみじロ	—	—	粗	—	東洋成時、山腰部に使用
P L20-17	1号赤系褐色土	別途凡	もみじロ	—	—	粗	—	東洋成時、山腰部に使用
P L20-18	物原2又	別途凡	ハセ	—	—	粗	—	北洋成時に使用
P L20-19	大市地平面1瓦砾层	別途凡	ハセ	—	—	粗	—	瓦砾成時に使用
P L20-20	物原2区 表層 1号赤系褐色土 1号赤系紫色土	別途凡	ハセ	—	—	粗	—	瓦砾成時に使用
P L21-1	物原2区表層	別途凡	土人形(カエル)	—	—	粗	—	一期米特堆
P L21-2	物原2区2面	別途凡	土人形(人)	—	—	粗	—	一期米特堆
P L21-3	物原1区表1黑色土層	別途凡	土蘿	2.8	2.7	2.0	粗	春季耕
P L21-4	物原2区水土灰F	別途凡	土蘿	—	2.7	3.0	5.5	春季耕
P L21-5	物原2区2層	別途凡	おろし器	—	—	粗	—	春季耕
P L21-6	物原2区2層	別途凡	+人形(鳥?)	—	—	粗	—	一期米特堆
P L21-7	大田庄SM0.8附近	瓦	桃丸(鬼丸)	—	—	粗	—	米特堆
P L21-8	表層上地内表1	瓦	桃丸(鬼丸)	—	—	粗	—	米特堆
P L22-1	物原2区	瓦	桃丸(鬼丸)	—	—	粗	—	春季耕
P L22-2	大田庄SM0.68	瓦	桃丸(鬼丸)	—	—	粗	—	米特堆
P L22-3	物原1区	瓦	—	—	—	—	—	肥前系統 滅臘耕作 明治
P L22-4	物原2区	瓦	—	—	—	粗	—	肥前系統 滅臘耕作 明治
P L22-5	物原1区水土灰下1層	瓦	—	—	—	粗	—	肥前系統 滅臘耕作 明治
P L22-6	物原1区表1層下1層	瓦	—	—	—	粗	—	肥前系統 滅臘耕作 明治
P L22-7	物原1区	瓦	—	—	—	粗	—	肥前系統 滅臘耕作 明治
P L22-8	物原3区表土生下層	瓦	—	—	—	粗	—	肥前系統 滅臘耕作 明治
P L22-9	物原5区	瓦	—	—	—	粗	—	肥前系統 滅臘耕作 明治
P L22-10	物原1区2層	瓦	—	—	—	粗	—	肥前系統 滅臘耕作 明治
P L22-11	物原2区2層 表土生下	瓦	—	—	—	粗	—	肥前・美濃系統 手植付 利津
P L22-12	物原2区1層	瓦	—	—	—	粗	—	肥前・美濃系統 手植付 明治
P L22-13	物原1区表1層下	瓦	—	—	—	粗	—	肥前系統 手植付 明治
P L22-14	東京2区2層 2区表土下	瓦	—	—	—	粗	—	肥前系統 手植付 总木
P L22-15	1号赤系褐色土層	瓦	—	—	—	粗	—	肥前系統 手植付 基木
P L22-16	1号赤系褐色土層	瓦	—	—	—	粗	—	肥前系統 手植付 基木
P L22-17	物原2区2層	瓦	—	—	—	粗	—	肥前系統 手植付 基木
P L22-18	物原1区2層	瓦	—	—	—	粗	—	小明屋(中間地方水か) 手植付 基木・明治か
P L22-19	物原2区地内表1層	瓦	—	—	—	粗	—	不明屋(中間地方水か) 手植付 基木・明治か
P L22-20	物原3区 表層	瓦	—	—	—	粗	—	小明屋(中間地方水か) 手植付 基木・明治か
P L22-21	人出屋根附2区2層 物原 5区 2区黄色土層 2区生土層F	瓦	—	—	—	粗	—	肥前系統 瓦板架柱 大正
P L22-22	物原2区水土灰下	瓦	人形(冠子)	—	—	粗	—	—



大田屋窯跡東側斜面調
査区調査前近景（南から）



大田屋窯跡物原 2～4
調査前近景（東から）



大田屋窯跡 1号窯調査
前近景（東から）



大田屋窯跡 1号窯発掘
(東から)



大田屋窯跡 1号窯発掘
(北から)



大田屋窯跡 1号窯発掘
(南から)





大田屋窯跡平坦面完掘
(南東から)



大田屋窯跡物原 2 堆積
状況



大田屋窯跡物原 2 堆積
状況